長崎県埋蔵文化財センター
研究紀要
第５号

序

長崎県埋蔵文化財センターでは、本県の埋蔵文化財担当職員に研究成果の発表の場を提供することを目的として、平成 22 年の開所以来継続して毎年度研究紀要を発刊しています。

このことは、埋蔵文化財の専門職員にとって、常に研鑽を積み、技術力を高め、新たなものを吸収し改善していくことは当然の使命であるとともに、本センターが長崎県の埋蔵文化財保護行政の中核機関としての責務の遂行と研究拠点としての機能の体現化にあります。

第５号となる今回は、各執筆者が過去の調査成果にさらに踏み込んで考察を加え書き上げたもので、旧石器時代から中世までの幅広い時代を対象とする考古学研究や自然科学分析についての内容となっています。

今後とも、「研究し広く世に発表する」ということを通して、専門的知識・技術の向上を図りながら、埋蔵文化財センターとしての調査研究機能の充実に取り組んでいきたいと考えています。

皆様のご指導やご叱正をいただければ幸いです。

平成 27 年３月

長崎県埋蔵文化財センター

所長　山　本　　忠　敬

長崎県埋蔵文化財センター
研究紀要第５号
目　　次

川道　　寛・辻田　直人
雲仙岳北麓土黒川流域の旧石器編年…… 1

古澤　義久
壱岐市勝本町浦海遺跡出土磨製石斧について…… 13

白石　渓冴
頭ヶ島白浜遺跡（平成７年度範囲確認調査）
TP ９（第９試掘坑）出土遺物 …… 23

片多　雅樹
判別図法を用いた黒曜石の産地推定
～原産地データの蓄積～…… 35

林　　隆広
松浦党城郭雑感～塩津留氏の城跡～…… 41

林　　隆広
諫早市飯盛町所在の城跡について
～東城跡・平古場城跡・岡城跡・囲城跡の検討～…… 45

例　　言

本書は、長崎県埋蔵文化財センター職員および本県埋蔵文化財関係者の研究活動の一端を示すことを目的として発刊されたものです。

掲載されている論文等の内容や意見は、執筆者個人に属し、長崎県教育委員会あるいは長崎県埋蔵文化財センターの公式見解を示すものではありません。

この研究紀要は、長崎県埋蔵文化財センター・ホームページ（http://www.nagasaki-maibun.jp/）で、PDF 形式でダウンロードできます。

長崎県埋蔵文化財センター
研究紀要　第５号
2015 年３月

雲仙岳北麓土黒川流域の旧石器編年

川道　　寛・辻田　直人

1．はじめに

長崎県南部島原半島北部の雲仙市を北流する土黒川流域は西日本における旧石器時代研究の始まりを告げた地域の一つである。1960・61 年の和島誠一・麻生優による百花台遺跡の調査は、旧石器の層位的な検出に成功して、一躍その名を世に知らしめた（和島・麻生 1963)。その後長崎県教育委員会による百花台広域公園・県道国見雲仙線等の開発にかかる調査（田川編 1988・1994）および同志社大学等による百花台東遺跡の調査（松藤編 1994）のように標高 200m 以上の土黒川上流の発掘調査が先行していた。近年、国見町教育委員会（現雲仙市教育委員会）による龍王遺跡をはじめとした土黒川下流域の調査が精力的に行われ、土黒川流域全体の石器群の変遷が明らかになりつつある。

そこで本稿では、現時点での土黒川流域で展開した石器群の変遷についてある程度の見通しを示しておきたい。なお本稿は、辻田の九州旧石器文化研究会第 40 回記念大会の発表および予稿（辻田 2014）を基本とし、川道との議論をまとめたものである。

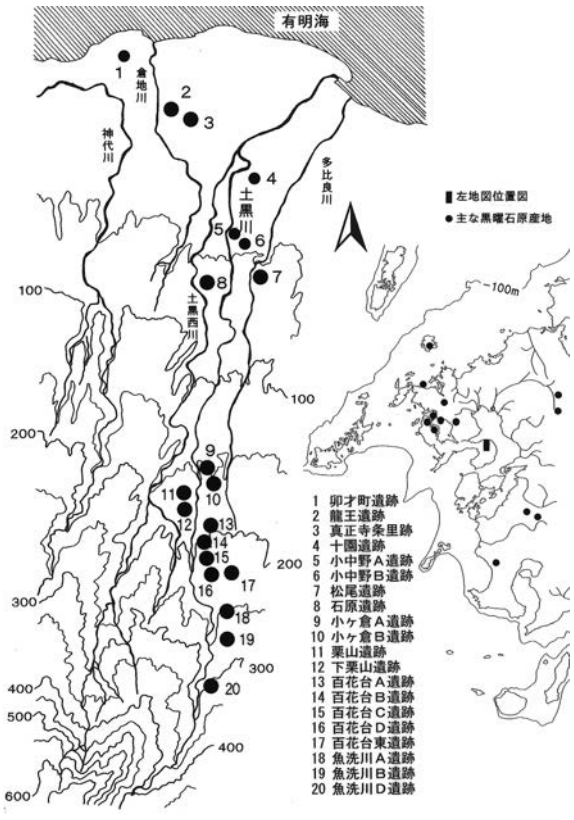
2．遺跡分布

本稿の舞台となる土黒川は、雲仙国見岳北麓の田代原付近に源を発する。土黒西川など多数の小支流をあわせて北流し有明海に注ぐ、全長 15km の２級河川である。氷期の海面低下時には筑後川と合流し、古東シナ海へとつながっていたと想定されている。

本地域では現在20箇所の旧石器時代の遺跡が確認・発掘調査されている（第１図)。大きく標高 150m 以上の百花台遺跡群と 50m 以下の遺跡群に二分される。百花台遺跡群は、百花台東遺跡を除いていずれも土黒川西岸の崖線近くの丘陵上に位置している。

これまで土黒川と土黒西川に挟まれた丘陵では石器群の存在は知られていなかったが、最近圃場整備に係る調査によって下栗山遺跡などで百花台型台形石器を含む良好な石器群が検出されており（辻田 2013)、今後の進展が期待される。

低標高域の遺跡群の多くは開発に伴って調査されたもので、重層的な検出例は少ないが、ブロックを単位としたまとまりのある石器群が多く、旧石器編年の構築に大いに寄与している。



第１図　遺跡分布（辻田 2014）

3．標準的な土層

島原半島北部の土層堆積は大きく８層に区分される（麻生・白石 1976）。

第Ⅰ層は表土・耕作土である。

第Ⅱ層は黄褐色を呈する火山灰土層で、層中にアカホヤ火山灰の降灰がみられる層準である。

第Ⅲ層はきめの細かい黒色火山灰土層で、細石刃石器群を主体的に包含する。

第Ⅳ層は混礫灰黒色土層である。非常に硬質の土層で軽石や角閃石安山岩粒を多量に含み、地元では「カシノミ層」と呼ばれる普賢岳の火山活動による噴出物で、「礫石原火砕流」に伴う堆積層である。半島の北東部に限定的に見られ、地点によって土質に変化がある。百花台型台形石器などを包含する。礫石原火砕流は２点の C^{14} 年代が明らかになっている（星住・渡辺 1995）。18000・14000yBP で、第Ⅳ層の帰属年代を示している。事実土黒川上流では礫石原火砕流が２層になっている地点がある。

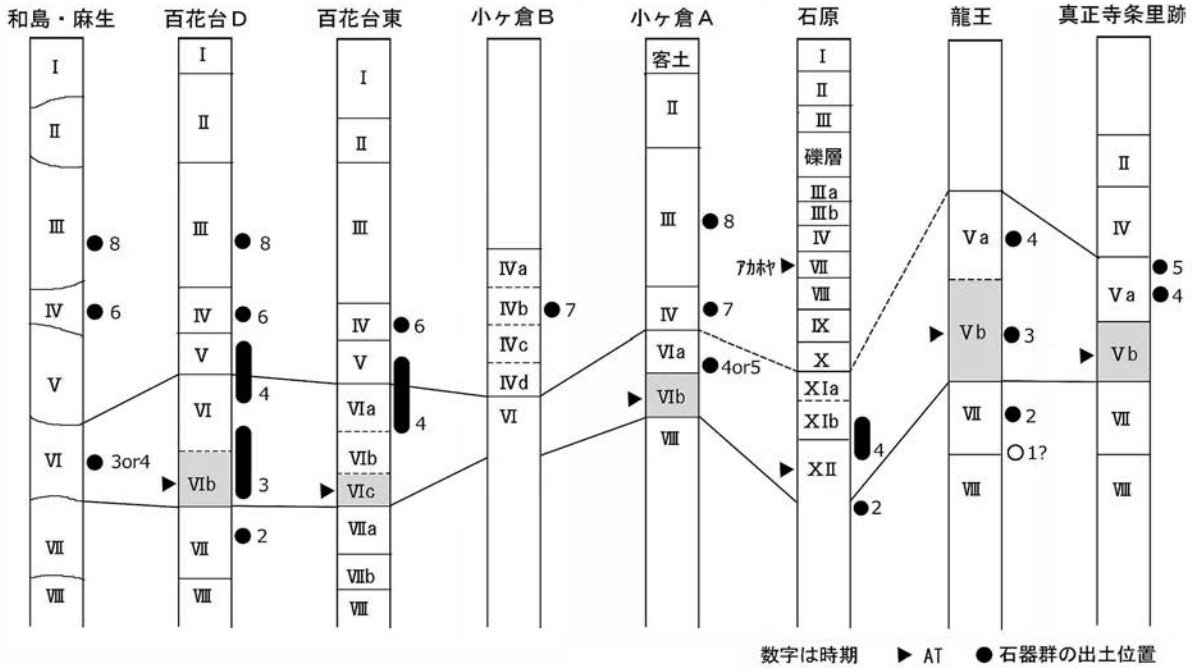
第Ⅴ層は茶褐色の粘質土層で、やわらかい土層で、ナイフ形石器や剝片尖頭器、角錐状石器などが見られる。

第Ⅵ層は暗褐色粘質土層である。非常に硬質で、クラックが発達する。百花台東遺跡ではⅥa・Ⅵb・Ⅵc と細分され、下層の第Ⅵc 層が AT 火山灰降灰層準である。ナイフ形石器や剝片尖頭器、原の辻型台形石器などが検出されている。

第Ⅶ層は軟質でキメの細かいサラサラの黒色火山灰土層である。いわゆる AT 下位の暗色帯（黒色帯）である。ナイフ形石器の検出が見られる。

第Ⅷ層は基盤層となる黄色粘質土層で、数ｍ以上の厚さが見られる。Aso4 火砕流起源の小粒の黒曜石原石が若干包含されており、細石刃核などとして利用される。

第２図に主な遺跡の土層対比図を示す。いずれの遺跡においても AT を包含する第Ⅵ層から最下層の第Ⅷ層については検出例が多いが、それより上位については地点によりばらつきがある。



第２図　土層対比と石器群の検出位置（辻田 2014 改変）

４．石器群の編年

この地域の編年は、従来百花台遺跡群によって組み立てられていたが、近年雲仙市教育委員会によって低標高域の調査が進み、新たな石器群が検出されている。それらを総合的に加味して土黒川・倉地川流域の編年を構築してみたい。

第１期

おそらくⅦ層下部を出土層準と考えられる石器群であろうが、現在までのところ原位置で確認した例はない。ここでは龍王遺跡倉地川地区で出土した北松玄武岩を素材とした３点を示した。３点ともに大形品で風化度・質感が福井洞穴駐車場資料と酷似している。作業員の証言によれば１はⅧ層（黄色土からの出土であったということだが取り上げた後であり確証はない。熊本県沈目遺跡・石の本遺跡、鹿児島県上場遺跡６下と同時期の所産と考えられよう。筆者らは松尾遺跡、石原遺跡から抽出した資料を後期旧石器時代初頭の石器群として紹介した（川道・辻田 2000）ことがある。松尾遺跡からは縄文時代早期の遺物と混在して、輝緑凝灰岩、安山岩等からなる祖形ナイフ形石器･台形様石器･局部磨製石斧などが出土しており、暗色帯下部に出土層準をもつ熊本県曲野遺跡や表面採集資料ではあるが同下横田遺跡などと類似している。石原遺跡からは台形様石器・円盤状の局部磨製石斧が出土している。これらに共通することは非黒曜石石器群であり、西北九州の黒曜石原産地が開発される以前に位置づけることができよう。ここでは今後の期待もこめてあえて１期として位置づけた次第である。今後の調査の進展によって１期の石器群の内容も明らかになってくるものと思われる。

第２期

Ⅶ層黒色帯に包摂される石器群である。Ⅶ層から石器が出土することは百花台広域公園に伴う百花台Ｄ遺跡の調査で確認されていたが、百花台東遺跡を調査した松藤和人らは文化層の認定に慎重な立場[1)]を示した（松藤 1994、門脇 1999)。その後雲仙市の調査によって石原遺跡・龍王遺跡でⅦ層石器群が明確な形で検出された。

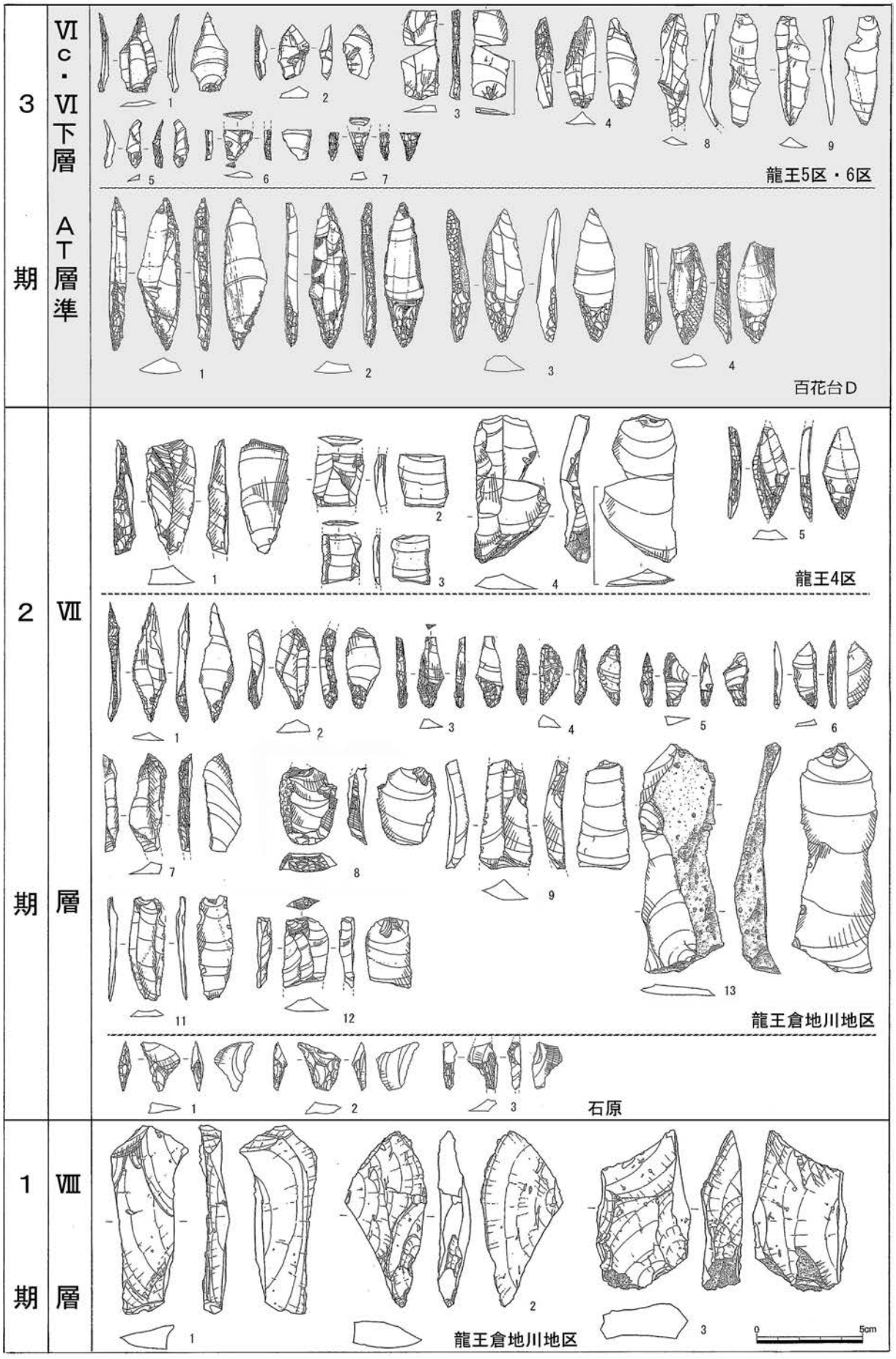
石原遺跡 12 区からは龍王遺跡と様相の異なる石器が少数検出されており、時期差をあらわすものと思われる。不定形剥片を素材とする台形石器、ナイフ形石器を組成している。点数が少なく、多くを語ることはできないが、淀姫系･腰岳系黒曜石の両者を保持している。日ノ岳Ⅲ層に近い石器群か。

龍王遺跡は、火山性山麓扇状地の末端近くの標高 20m、倉地川の東岸に位置し、比高は約 5m を測る。土黒川と倉地川の間の倉地川に沿った部分は標高 20m 前後に安定した土層堆積がみられ、往時の好環境が想定される。Ⅶ層石器群は倉地川地区および４地区の２箇所で検出されている。

倉地川地区の石器群は縦長剥片素材のナイフ形石器を主体とし、エンドスクレイパー・彫器を組成する。柳葉形を呈する二側縁加工のナイフ形石器には特徴的な基部裏面加工の平坦剥離が見られる。ナイフ形石器には小形のものもある。素材の縦長剥片は打面を固定した石核から剥離されたもので、打面部調整も顕著である。原石をそのまま搬入し石器製作を行なった痕跡がみられる。

龍王遺跡４区の石器群は出土した点数は少なくブロックも看取されないが、同一個体とも考えられる腰岳産黒曜石を素材とした片側縁加工で先端を階段状剥離によって欠損する大形のナイフ形石器を組成している。また風倒木痕から出土した二側縁加工のナイフ形石器は倉地川地区のそれと同様の基部裏面加工が施されている。この資料はⅦ層出土して大過ない。

龍王遺跡の倉地川地区、同４区の石器群は、剥片に残された礫面の状態から腰岳産の原石を搬入し


3
期
Ⅵc・Ⅵ下層
ATに準
龍王5区・6区
百花台D
2
期
Ⅶ
層
龍王4区
龍王倉地川地区
石原
1
期
Ⅷ
層
龍王倉地川地区
0
5cm

第３図　雲仙編年１～３期

て石器製作を行ったことが想定される。つまり縦長剥片を素材として基部裏面加工のナイフ形石器と腰岳産黒曜石には強い紐帯があることがわかる。

２期では石原遺跡が先行し、龍王遺跡の例は AT 直前におくことができよう。また百花台 D 遺跡 D 区Ⅶ層の小鯛産黒曜石を素材とする小形ナイフ形石器、石核の一群もこの時期に位置づけられよう。

第３期

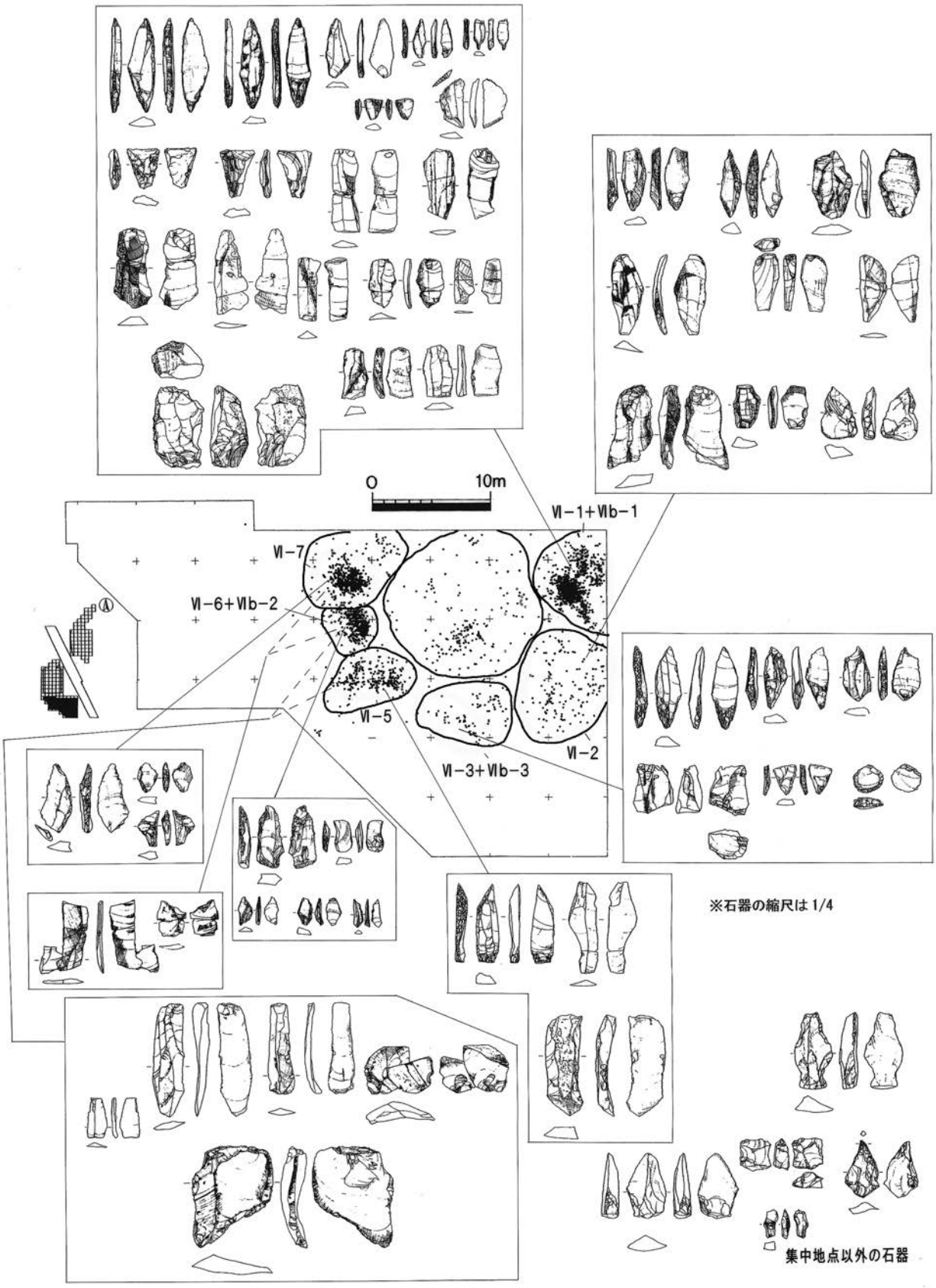
AT 降灰層準であるⅥ層下部（Ⅵc 層・Ⅵb 層と表記することもある）からⅥ層中位を出土層準とする石器群である。Ⅶ層とは不整合である。

龍王遺跡５区・６区では AT 降灰層準から縦長剥片素材の１側縁加工のナイフ形石器が主体の石器群が検出されている。ナイフ形石器以外は使用痕のある剥片が数点である。石材は佐世保市針尾の青灰色黒曜石が半数を占め、先述した倉地側地区のⅦ層石器群が腰岳産黒曜石の単一石材利用とは大きく様相が異なり、時期差の一端を示している。一貫した縦長剥片剥離や一部のナイフ形石器には基部裏面調整などの共通点もあるが、打面転移を繰り返した石核がみとめられ剥離技術の変化が見られる。

百花台 D 遺跡は 1984 年に調査され、遺物は主にⅣ層から第Ⅶ層まで検出され、総数 5,742 点と報告されている。報告書（田川編 1988）では、主な出土遺物の実測図のほかに、各層ごとの遺物の検出状況や石材ごとの分布状況などが掲載され、各集中地点の概要が記されている。また、調査区全体から出土した遺物をブロックを無視して、土層ごとに単純に並べた編年案が提示された。そのため石器群としてのまとまりを欠いたものとなり、松藤らの批判があったことは先に述べたとおりである。

E 区では第Ⅶ層で２箇所、第Ⅵb 層で３箇所、第Ⅵ層で 11 箇所の石器集中地点が報告されている。第Ⅶ層～第Ⅴ層にかけて同一箇所での重層部分があることがわかる。土層の境目付近ではクラックや凹凸などもあり、どちらに帰属するのか判断がつかない遺物も多い。第Ⅵb 層と第Ⅵ層についてはほぼ同一の土層で、下側のやや色調が明るい部分を第Ⅵb 層（AT）と細分している。Ⅵb-1 とⅥb-2 はⅥ-1 とⅥ-6 とそれぞれ重複している。Ⅵ-1 は 1,000 点以上、Ⅵ-6 は 500 点以上の石器が検出されており、土層で区切ると別の集中地点ということになるが、Ⅵb-3 も含めて本来は同じ集中地点の遺物と考えられる。上層の第Ⅴ層でも、第Ⅵ層と同様の範囲に集中地点が見られるが、重層する部分としない部分がある。第Ⅵ層において第Ⅵb 層と重複するⅥ-1、Ⅵ-3、Ⅵ-6 集中地点については第Ⅴ層になると重層する集中地点がなくなるが、Ⅵ-5 やⅥ-7 などは、第Ⅴ層と重層することがわかる。第Ⅵ層出土遺物については若干の上下差を分布状況から予想できる。

次に各集中地点の遺物について見てみる。Ⅵ-1+ Ⅵb-1、Ⅵ-5+ Ⅵb、Ⅵ-6+ Ⅵb-2 の濃密な集中地点においては 90％以上が腰岳系の黒色黒曜石で、Ⅵ-6 にいたっては 99％を超える割合である。これに対し、Ⅵ-4、Ⅵ-8 ～Ⅵ-11 については、黒色黒曜石以外の石材が目立つ。石器の分布状況をみると、ブロックを取り囲むように黒色黒曜石製のナイフ形石器が並ぶ状況が看取できる。第５図に各ブロック出土の石器群をまとめている。ほとんどの黒色黒曜石石器群は石器分布図の周囲を環状に巡る６ヶ所のブロックにおさまることがわかる。E 区の第Ⅵb 層・第Ⅵ層は 90％以上が黒色黒曜石であり、さらにその実に 98％以上が第５図に示す６ヶ所のブロックから出土している。百花台 D 遺跡 E 区第Ⅵb 層・第Ⅵ層の石器群は腰岳系の黒曜石を素材とするナイフ形石器を主体とする石器群で、環状にそのブロックが巡る。チップ類が数百点以上集中する部分とⅥ-2 やⅥ-3+ Ⅵb-3 のように粗い分布を示す部分にわかれる。前述のように各層の分布図の検討により、第Ⅵb 層と重複する３箇



第４図　百花台Ｄ地区遺跡Ｅ区Ⅵｂ、Ⅵ層集中地点石器出土状況（辻田 2014 改変）

所の集中地点とそれ以外には検出状況の上下差があり、時期差が想定されるが、石器群の内容等を見ると同一の文化層内におさまるものと考えられる。

第４期

Ⅵ層上半からⅤ層にかけてを出土層準とする石器群である。百花台東遺跡や真正寺条里跡２区を代表とする剝片尖頭器を主体的に組成する石器群である。

百花台東遺跡第１文化層の石器群は、中央のブロックを７つのブロックが取り囲む環状ブロックの体をなしている。個体別資料や接合資料の分析によってほぼ同時期の所産としている。詳細な原産地分析の結果、使用される石材は多様化しており、西北九州の黒曜石はいうに及ばず南九州産と思われる頁岩類も認められる。剝片尖頭器・中原型ナイフ形石器のほか角錐状石器、原の辻型台形石器を組成している。剝片尖頭器の形態や原の辻型台形石器の存在からして剝片尖頭器を含む石器群のなかでは初期とはいえない。龍王遺跡に近接する真正寺条里跡２区の石器群は、他時期と混在しない単一のブロックであり、分布はやや疎である。総数で 203 点がドットで取り上げられている。剝片尖頭器に代表される石器類はブロックの周縁に散在する形である。石器群は、剝片尖頭器を中心にして台形石器・ナイフ形石器・角錐状石器・削器・彫器などが組成されている。使用された石材は腰岳系や淀姫系の黒曜石や頁岩、安山岩など多岐にわたっている。剝片尖頭器の基部が広くやや上方にノッチ状の調整が見られることや国府系のナイフ形石器、大形の枝去木型台形石器などからみて後出する要素を示している。また、剝片尖頭器の素材と考えられる大型の縦長剝片も検出されている。南九州産頁岩製の剝片尖頭器は砕片類が見当たらず搬入品と考えられる。

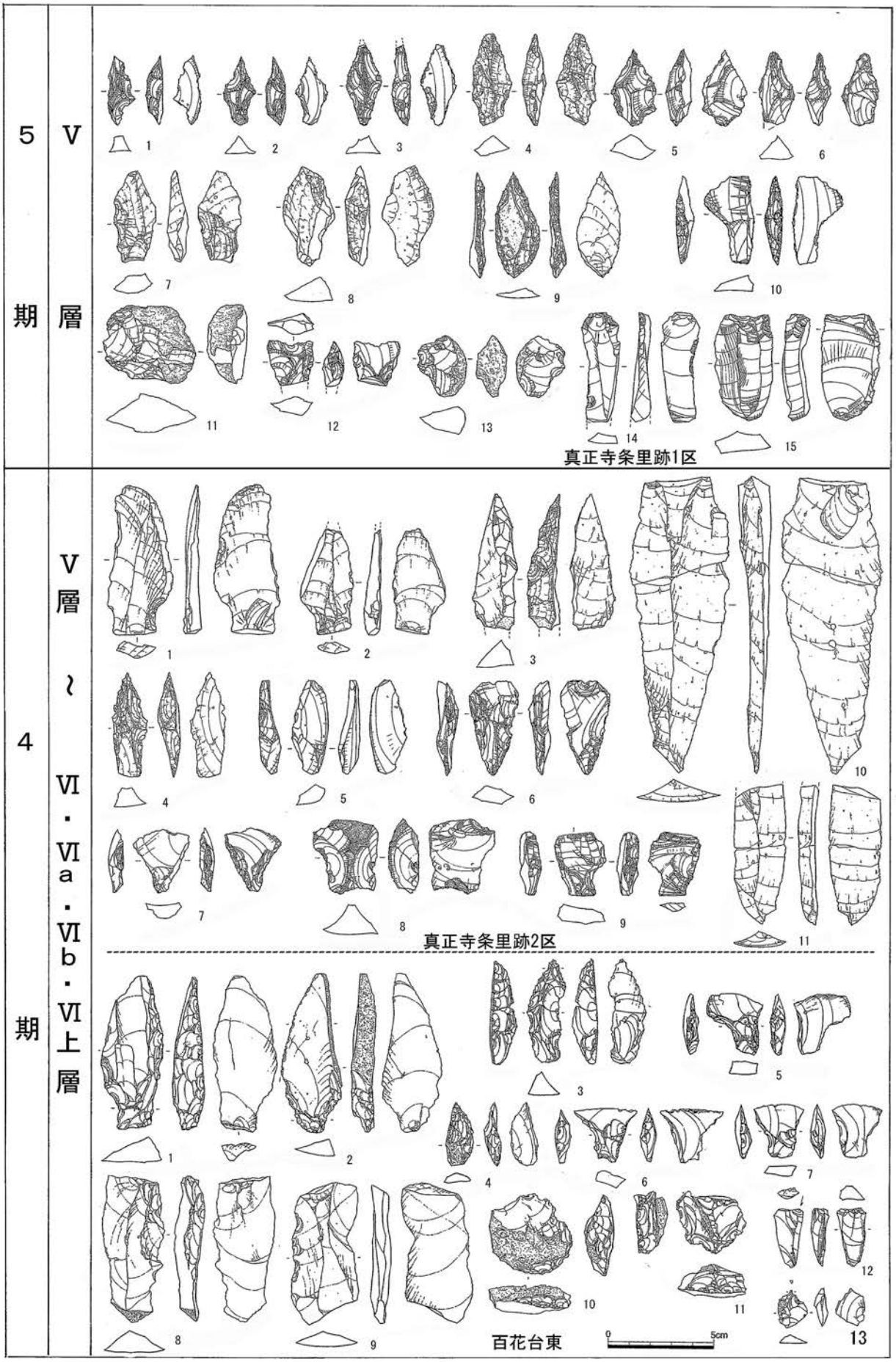
第５期

Ⅴ層を出土層準とする石器群である。剝片尖頭器は終焉しており、西北九州型角錐状石器と呼ばれる黒曜石製の尖頭器類が組成されるようになる。

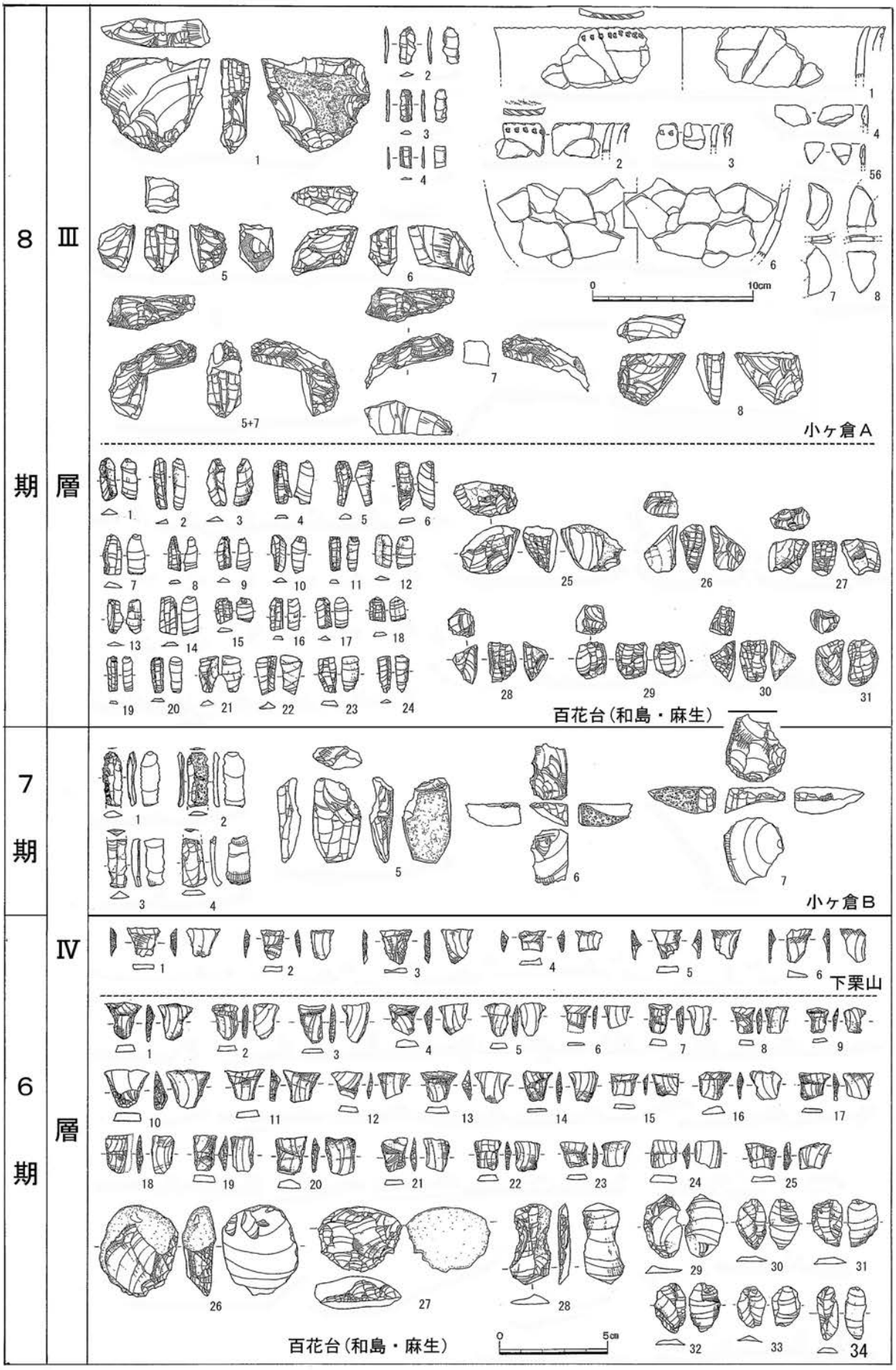
真正寺条里跡１区の資料を基準とする。１区では４個所のブロックが見られ、382 点の石器が検出されている。ブロックのうち１～３は近接して、４は 10m 余り離れている。小形の角錐状石器や日の岳型尖頭器を主体とし、周縁加工のナイフ形石器や縦長剝片素材の掻器・削器・彫器などからなる石器群である。黒色の腰岳系黒曜石が卓越するが、青灰色の淀姫系黒曜石や安山岩は２箇所に集中する傾向が認められる。また器種に対応した石材選択が認められ、角錐状石器は腰岳系・淀姫系黒曜石が、掻器・削器・彫器などには腰岳系黒曜石が、また台形石器には淀姫系黒曜石が使用されている。安山岩はそのほとんどが尖頭器類に供されており、縦長剝片剝離の痕跡は見られない。当地区の石器群は黒曜石製の角錐状石器を主体的としながら、それを補完するように安山岩製の尖頭器類を組み込む石器群である。また、石材によって検出箇所も異なり、石器の製作や使用する場にも違いがあることが伺える。そのほか、数点ではあるが削器・掻器類の中には凝灰岩や椎葉川産灰白色黒曜石で作成されたものもあり、石器の機能に応じた石材の選択もしくは搬入が想定できる。西輪久道遺跡上層においても西北九州型角錐状石器や日の岳型尖頭器が出土しており、この時期の所産と考えられる。

第６期

Ⅳ層（礫石原火砕流）を出土層準とする百花台型台形石器を指標とする石器群である。礫石原火砕流には異なる２つの C^{14} 年代が明らかになっており、第６期は大略 18000yBP ～ 16000yBP といった時期におくことができよう。



第５図　雲仙編年４・５期



第６図　雲仙編年６～８期

この時期を代表する石器群が和島・麻生による百花台遺跡第Ⅲ文化層である。後に実施された長崎県教育委員会による県道調査の折にも 154 区とされるグリッドから数百点にのぼる大量の百花台型台形石器が出土しているが、和島・麻生の調査区はそれが分布する範囲の中心部に該当する。百花台型台形石器自体は非常に小形であり単体での使用は想定できないことから組み合わせ道具としての認識が一般的である（小田 1971）。百花台型台形石器はその形態的特徴（刃部側に角状になる）から認定が容易であり、広く西北九州に普遍的に分布するが、遺跡単位で見ると数点にとどまる場合が多い。例外的に多くのそれを出する遺跡は平戸市中山遺跡、同神の遺跡Ｂ地点などに限定されていた。土黒川流域も例外ではなく百花台東遺跡の報告書においてもこの石器群の扱いには慎重な立場である。

最近雲仙市教育委員会（辻田 2013）が調査した下栗山遺跡は、百花台遺跡群の存在する土黒川の西岸ではなく、それまで旧石器時代の遺跡が空白であった土黒川と土黒西川の間の丘陵部に位置する。下栗山遺跡ではⅣ層の礫石原火砕流は存在しないことから、この火砕流が百花第遺跡群の位置する土黒川西岸を凍限とすることが考えられる。問題となるのはその出土層準であるが石器群から見てⅣ層相当層として大過ないであろう。出土している石器群は調査範囲が狭小なため６点の百花台型台形石器のみで多くを語ることはできないが、第６期を考える上で欠かすことのできない石器群となろう。

第７期

Ⅳ層上部を包含層とする細石刃石器群の時期である。後期旧石器時代最終末に位置づけられる。この地域では検出例が少ない。

小ヶ倉Ｂ遺跡ではⅣ層（礫石原火砕流）の土壌化が進行したと思われる土層を４層に区分した。遺物はⅣｂ層を中心として若干その下位のⅣｃ層からも出土した。散漫な単一ブロックを形成し、細石刃関連以外の資料を含まない単純な石器群である。細石刃 50 点、細石刃核１点、打面再生剝片２点、打面調整剝片２点、加工痕のある剝片１点のほか総数 116 点が出土している。使用された石材としては、青灰色の淀姫系黒曜石が 14 点の他はすべて黒色の黒曜石で占められ、礫面の観察から牟田産と思われる。細石刃核は、細石刃剝離作業面が幅広で、背面が礫面で構成される茶園型であり、大村市野岳遺跡、五島市茶園遺跡Ⅴ層、大分県亀石山遺跡などと同時期と考えられる。

土黒川流域からは検出されていないが、福井洞穴の層位的成果から第７期と第８期の間に、福井洞穴４層のいわゆる船野型細石刃核をもつ一群がある。

第８期

縄文時代草創期に該当する細石刃石器群が主体となる時期である。百花台Ⅲ層に本来的な層準があるが、Ⅱ層からも多くの細石刃石器群関連の遺物が出土する。Ⅲ層とⅣ層の層相は大きく異なり両者は不整合である。

百花台遺跡第Ⅲ文化層（麻生・白石 1976）から出土する細石刃核には、打面に横打調整を施す西海技法よるもののほか小円礫を素材とした見かけ上「野岳・休場型」となるものの二者がある。腰岳系、淀姫系黒曜石が前者に対応し、後者にはこの時期にはそれまでのナイフ形石器文化期には使用されなかった阿蘇４火砕流起源の小円礫を呈する黒曜石が用いられている。この小円礫は８期になって新たに開発された原石であり、剝取できる細石刃は短く、一点あたりからの数も少ないため大量に使用されたものと思われる。龍王遺跡や伊古遺跡でも使用されている。また鹿児島県桑ノ木都留産黒曜石も登場する。土器段階と思われるが土器そのものの出土はない。

小ヶ倉 A 遺跡は土黒川西岸にあり、標高 150m を測る。国見町教育委員会における小規模な調査が行われている（辻田 2012)。腰岳系黒曜石を素材とした打面部や側面の擦痕をもつ粗い調整剥離が特徴的な大振りの楔形細石刃核と押圧文土器（泉福寺洞穴でいう押引文土器）と共伴している。C^{14} 年代は 12370 ± 50yB.P. (Beta-179001) という数値であり、当該期の年代としては整合性が高い。このほかいわゆる「野岳・休場型」の細石刃核とスポールの接合資料も出土しており、細石刃文化期最終末の技術構造を知るうえで重要である。開地遺跡での細石器と土器共伴の一例を追加した貴重な例となった。福井洞穴２層、泉福寺洞穴５～６層、茶園遺跡Ⅳ層、城ヶ岳平子遺跡などと同時期で縄文時代草創期後半に位置づけられる。

５．まとめ－石器群と石材環境に留意して－

土黒川流域では火山灰に恵まれ AT 下位のⅦ層から断続的に石器群が検出される。特に百花台遺跡については連続した土層の中で重層して石器群が検出されており、さながら遺物が混在するかのように見える百花台遺跡群であるが、詳細に観察すれば各層の文化層を抽出することが可能である。またこの地域は、石器製作に使用される石材がほとんど産出されないことから、石材利用のあり方の分析は旧石器時代人の行動を知る手がかりとなる。

第１期の石器群は推量の域を出ないが、黒曜石を石材として使用する以前と考えられる。松尾遺跡で認められる輝緑凝灰岩はこの時期に限定される可能性が高い。

第２期の AT 下位Ⅶ層暗色帯の龍王倉地川地区では、腰岳系黒曜石に特化したナイフ形石器の一群が見られる。黒曜石原石を搬入し、遺跡内で一貫した縦長剥片剥離を行なう石器群である。エンドスクレイパー・彫器を伴う。百花台 D 遺跡 D 区、E 区のⅦ層も上位層と分離できる可能性が高い。

第３期の AT 前後の第Ⅵ層出土の百花台 D 遺跡 E 区と龍王遺跡５区・６区の使用石材や剥離技術を比較すると、百花台 D 遺跡 E 区がより古期にあたる。百花台 D 遺跡 E 区は 3,000 点にのぼる腰岳系黒曜石で構成された石器群で、龍王遺跡と同様一貫した縦長剥片剥離技術を基盤とする。AT 降灰直後の時期と考えられ、両遺跡は AT 降灰前後の特徴的な遺跡のあり方を示している。

第４期にあたるⅥ層上半部分で検出される百花台東、真正寺条里２区、十園遺跡などの剥片尖頭器を含む石器群では、西北九州の黒曜石のほかに安山岩や頁岩の利用が見られる。頁岩は剥片尖頭器や中原型ナイフ形石器に特徴的に見られる石材である。また、頁岩製の石器については遺跡内での製作の痕跡がほとんど見られず搬入品と考えられる。産地については不明ながら南九州産との理解が今のところ有力である。第４期にみられる剥片尖頭器は後出的な要素が強いことから、出現期の剥片尖頭器をもつ一群が前段階にくると思われる。長崎県の調査で出土した資料にそれを思わせるものが認められるが明瞭に区分することはできない。

第５期は、Ⅵ層より上位のⅤ層に相当する時期で真正寺条里１区、十園遺跡Ⅳ層などがある。真正寺条里１区ではブロックでの器種の分布のあり方に違いや器種に対応した石材選択なども見られる。

第６期は礫石原火砕流起源のⅣ層に包含される石器群の時期で、百花台型台形石器に特化した形で出現する。ナイフ形石器の終末期に顕在化する小形ナイフ形石器の一群がこれに後出するものと思われる（萩原 1995）が本地域では確認できない。

第７期も本地域では希薄である。旧石器時代最終末の細石刃石器群で茶園型細石刃核を保持する。

第８期は縄文時代草創期に該当する時期である。百花台遺跡ではこの時期に開発された在地系の石材である阿蘇４火砕流起源の黒曜石を使った細石刃核が大量に出土する。

このようにもともと遺跡近傍に石器石材を有しない土黒川流域では、時代の変遷に応じて獲得する石材が変化する姿が明らかになった。

おわりに

宮崎県旧石器文化研究会による宮崎 10 段階編年に倣って、土黒川流域の編年を組み立ててみた。現段階では８期に区分されるが将来的には細分がなされるものと思われる。石材のうち黒曜石については蛍光Ｘ線分析が進行しつつあり、科学的データに基づいた議論ができる素地が作られようとしている。

2012 年５月、麻生直子・下川達彌・岡本東三各氏のご尽力により和島・麻生による百花台遺跡の出土品が図面類とともに一括して雲仙市に譲与された。三氏のご配慮に深く感謝いたします。また先に長崎県の資料も譲与されており、百花台東遺跡を除いて百花台遺跡群の資料が一堂に会した。

本稿の執筆に当たって、下川達彌氏（活水女子大学）、寺沢智子氏（神戸女子大学）、片山己貴子氏には文献収集のお手を煩わせた。また九州歴史資料館の杉原敏之氏からは貴重なご助言を頂いた。記して謝意を表します。

【註】

註１　百花台Ｄ遺跡のⅦ層出土石器群のブロックが上位層のⅥ層・Ⅴ層のそれと重複することなどを根拠にⅦ層石器群の問題をペンディングするとした（松藤 1994）。その後門脇秀典が百花台Ｄ遺跡Ｄ区を取り上げて詳細な分析を試みている（門脇 1999）。

【引用・参考文献】

麻生優・白石浩之 1976「百花台遺跡」『日本の旧石器文化』３、雄山閣。

小田静夫 1971「台形石器について」『物質文化』18、物質文化研究会。

門脇秀典 1999「百花台Ｄ遺跡Ⅶ層出土遺物の検討」『考古学に学ぶ－遺構と遺物－』同志社大学考古学シリーズⅦ、同志社大学考古学シリーズ刊行会。

川道寛・辻田直人 2000「長崎県国見町の中期旧石器時代と後期旧石器時代初頭の石器群」『旧石器考古学』59、旧石器文化談話会。

川道寛 2005「土黒川流域の細石器文化」『九州旧石器』第９号、九州旧石器文化研究会。

川道寛 2011「西北九州細石器文化終末期の石材獲得」『九州旧石器』第 14 号、九州旧石器文化研究会。

下川達彌・萩原博文 1983「西北九州における旧石器石器群の編年（上・下）」『古代文化』35-6・9、古代学協会。

田川肇編 1988『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書第 92 集、長崎県教育委員会。

田川肇編 1994『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書第 116 集、長崎県教育委員会。

辻田直人 2002『松尾遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）第２集　長崎県国見町教育委員会（現雲仙市）。

辻田直人・竹中哲朗 2004『十園遺跡』国見町文化財調査報告（概報）第４集長崎県国見町教育委員会（現雲仙市）。

辻田直人 2007『龍王遺跡Ⅱ・真正寺条里跡』雲仙市文化財調査報告書第２集、長崎県雲仙市教育委員会。

辻田直人 2012『小ヶ倉Ａ遺跡』雲仙市文化財調査報告書第 11 集、長崎県雲仙市教育委員会。

辻田直人 2013「百花台型台形石器が出土した下栗山遺跡」『九州旧石器』第 17 号、九州旧石器文化研究会。

萩原博文 1995「第２章　平戸の旧石器時代」『平戸市史　自然・考古編』平戸市。

松藤和人編 1994『百花台東遺跡』同志社大学文学部考古学調査報告第８冊、同志社大学文学部文化学科。

和島誠一・麻生優 1963「島原半島　百花台遺跡の調査」『日本考古学協会 38 年度大会発表要旨』日本考古学協会。

長崎県埋蔵文化財センター
研究紀要　第５号
2015 年３月

壱岐市勝本町浦海遺跡出土磨製石斧について

古澤　義久

Ⅰ．浦海遺跡の立地・環境

浦海遺跡は壱岐市勝本町本宮仲触字浦海に所在する。標高０～ 10m の岩石海岸潮間帯に位置し、満潮時には水没する。縄文時代と古墳時代の遺跡である。遺跡の範囲は浦海集落の前面に拡がる約 100m 程度の岩石海岸及びその背後の丘陵鞍部に広がっている。浦海海岸は南向きで、西には標高 46.6m の丘陵があり、北西風を避けることができる立地となっている（図１, 図２, 写真１, 写真２）。

申叔舟により 1471 年（成宗２年）に著された『海東諸国記』の「日本国紀」には「于羅于未浦五十餘戸」という記述があり、「于羅于未」は「ウラウミ」（現代韓国語；우라우미）と読めることから浦海の地名は遅くとも 15 世紀には成立しており、集落が営まれていたようである。後藤正恒と吉野靭千代により 1861 年（文久元年）に著された『壱岐名勝図誌』巻之二十二「浦海」（図３）に描かれている「浦海」が浦海遺跡に該当する。現在では一部護岸が行われているが、19 世紀にも海岸が広がり、背後に丘陵があったことが確認される。なお、『壱岐名勝図誌』の「浦海濱」には「南向長七拾間　沖に鳴瀬、長瀬、平瀬あり。むかしハ此所家居多くありて七浦の内なりしか、寛文年中湯本浦に移さるとなん。今ハ民戸二三烟あるのみ。」という記述があり、本来多く家々があり代表的な浦の一つであったが、寛文年間（1661 年 -1672 年）に湯本浦に移転したため、２、３戸の家が残るのみとなったということが示されている。附近には豊玉彦神を祭神とする浦海神社があるが、創建年代は不明である（長崎県神職会壱岐支会 1941）。

壱岐島の海岸は大部分が岩石海岸で、東海岸には砂浜海岸が発達し海岸砂丘もみられる（石井・鎌田 1965）。壱岐島の縄文時代遺跡はこの西海岸岩石海岸の潮間帯に多く集中しているという指摘があり（横山 1990）、本浦海遺跡も壱岐島西海岸潮間帯遺跡の一つを構成している。周辺の縄文時代遺跡としては浦海遺跡から湯本湾沿いに南東方約 1.5km に松崎遺跡（田中 2003）、湯本湾を挟んだ対岸南方約 1.8km に大柳遺跡（長崎県教育委員会 1994）が所在する（図１）。

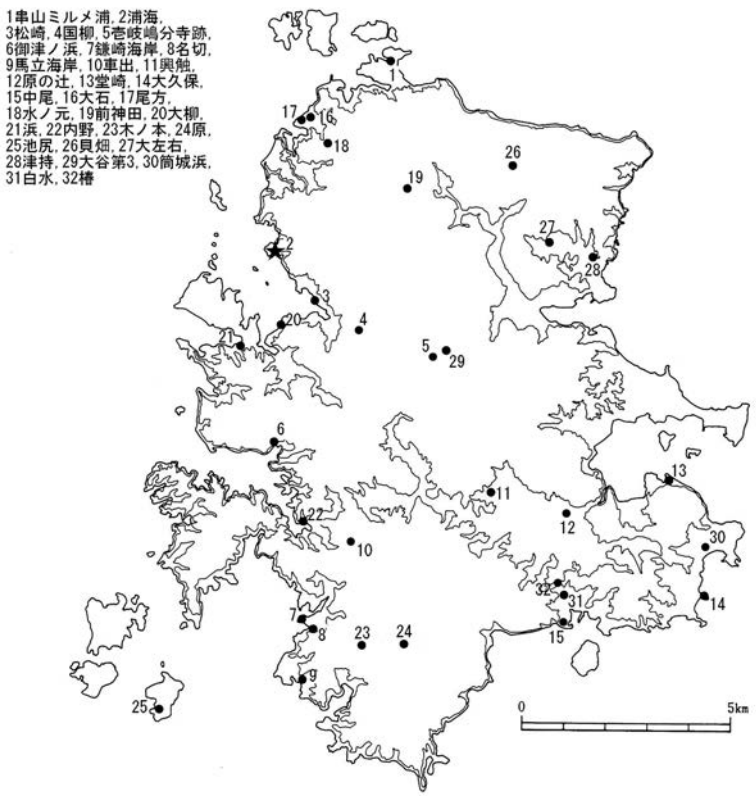


図１　壱岐島縄文時代遺跡

図２　浦海遺跡

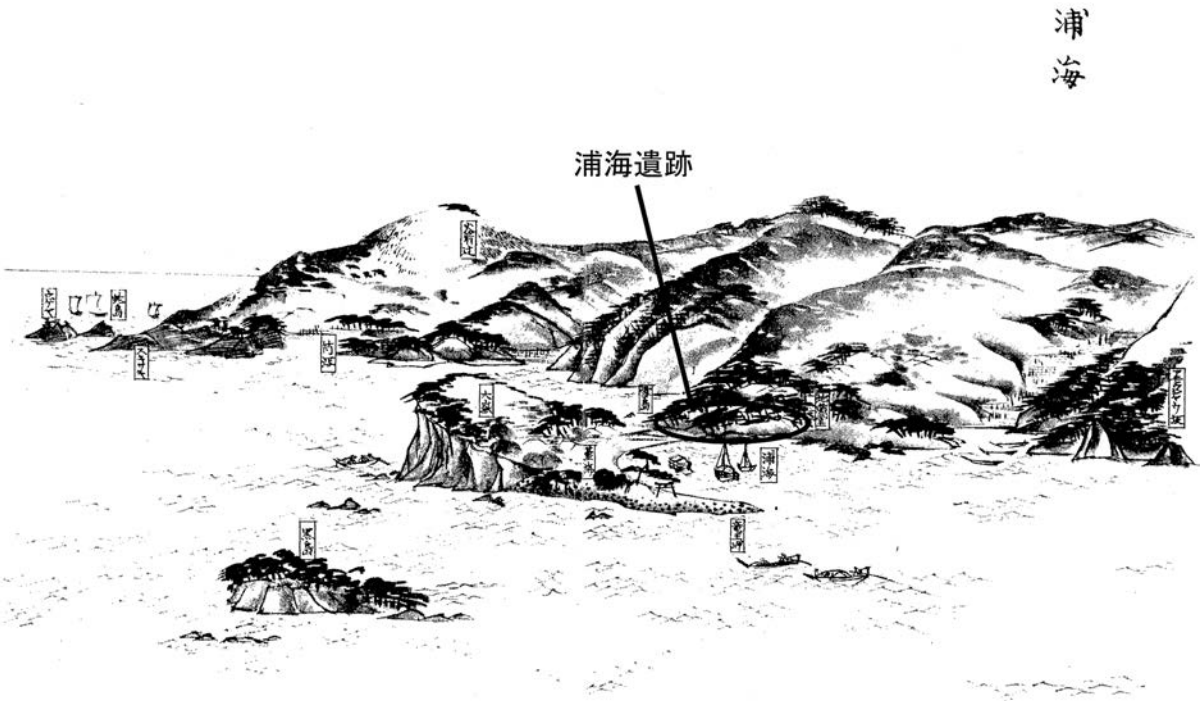


図３　『壱岐名勝図誌』「浦海」

Ⅱ．浦海遺跡の調査

浦海遺跡は 1985 年 5 月 24 日、長崎県教育委員会による分布調査において須藤正人、宮﨑貴夫、草野誠司によって発見された。その後、幸いにして開発の手が及ぶことはなく、今日まで発掘調査は

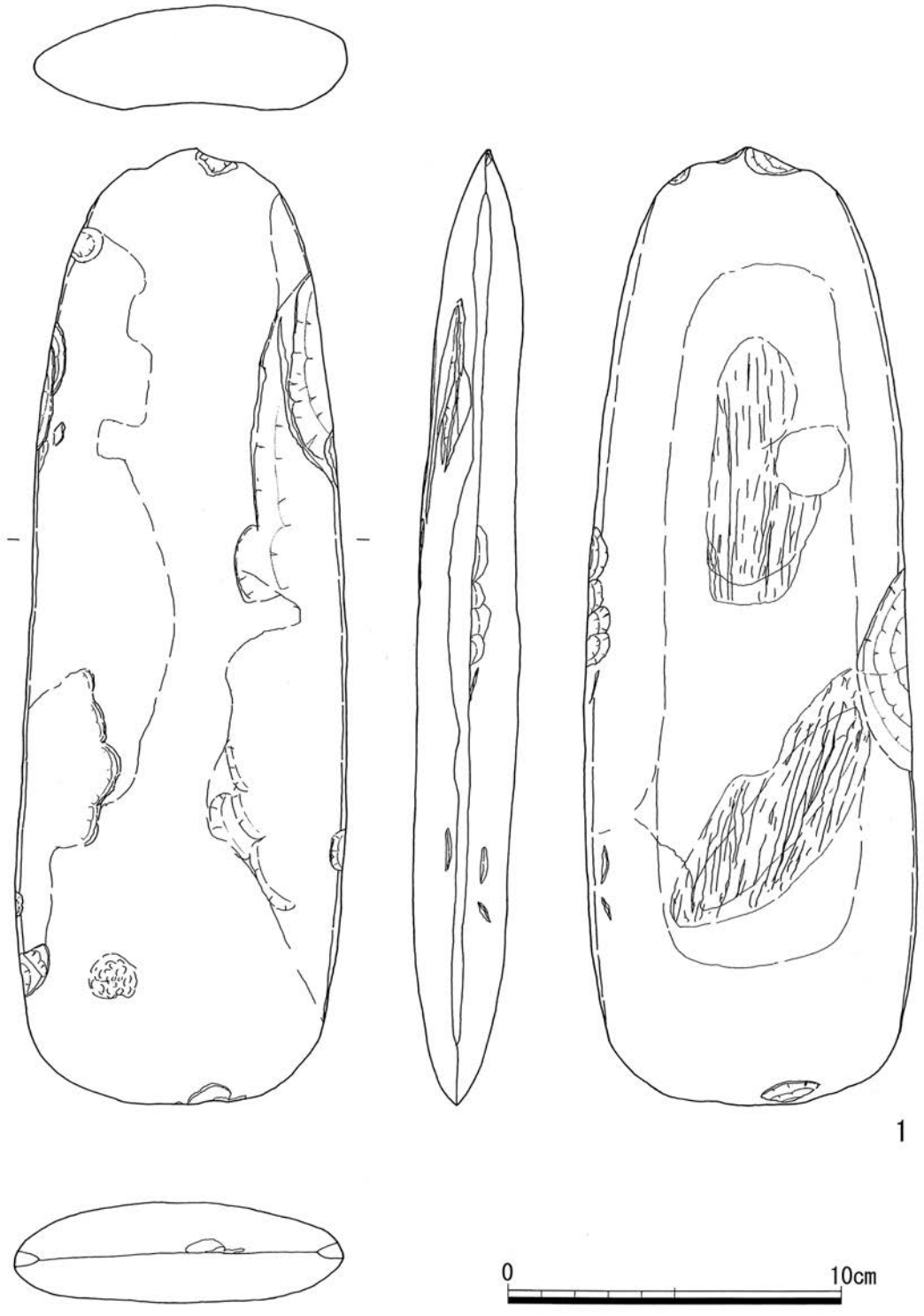


図４　浦海遺跡出土磨製石斧

行われていない。筆者も 2013 ～ 2015 年にかけて数次にわたり現地を踏査しているが、明治時代の印判手蓋（写真４）及び碗以外に遺物を発見することはできなかった。

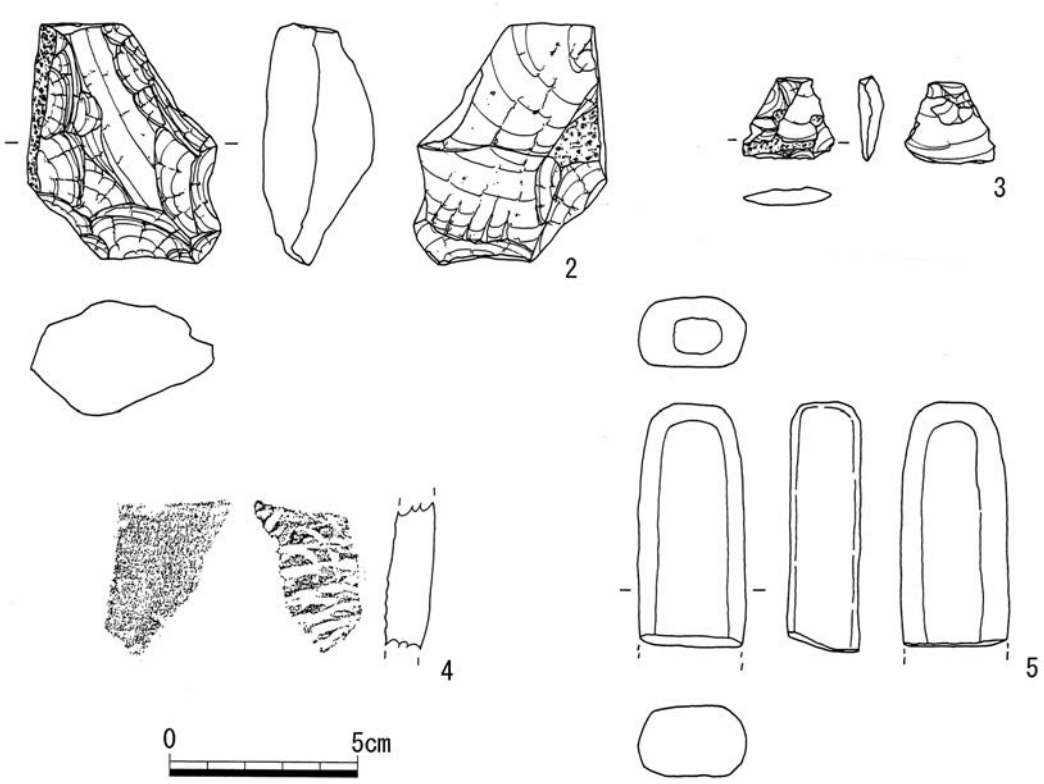


図５　浦海遺跡出土遺物

Ⅲ．浦海遺跡採集遺物

遺物は石器と土器が採集されており、１は 1985 年の分布調査以前に遺跡周辺の住民により採集されたもので、２～５は分布調査時に採集されたものである。

１．石器（図４～５, 写真５～ 12）

１は磨製石斧である。長さ 28.8cm、幅 9.9cm、厚さ 3.1cm、重さ 466.40g である。素材は玄武岩である。玄武岩は壱岐島の基盤層をなし、浦海遺跡の海岸部でもみることができる（写真３）。平面形態は基部が円基で、刃部は円刃をなし、側刃角は曲線をなす形態である。断面形態は楕円形で、側面などの面取は行われていない。両凸刃（佐原 1977,1982）である（写真７～９）。基端も刃部様に研磨されており、両凸刃である（写真７, ８,10）。大型の素材を全周から整形加工し、全体を研磨し、石斧を作出したものと考えられ、研磨が及ばなかった箇所には整形加工痕が残っている。中央部では研磨が顕著な箇所がみられ、その範囲を破線で表現した。なお、中央部に窪んだ部分がみられ、内部に筋状の擦痕がみられる。このような擦痕は壱岐島内の玄武岩にしばしばみることができ、研磨の及ばなかった部分に自然面が残ったものとみられ、人為的なものではないと判断した。柄に装着されたことがあるかどうかは不明である。

２はサヌカイト製礫器である。長さ 6.76cm、幅 4.46cm、厚さ 2.81cm、重さ 87.58g である。右辺と下辺に刃部が形成され、左辺と裏面の一部に原礫面が残る。背面には大きな剥離がみられ微細な調整はみられない。３は黒曜石製剥片である。長さ 2.19cm、幅 2.39cm、厚さ 0.69cm、重さ 3.17g である。正面には原礫面が残る。５は不明石器で、下部が欠損している。残存長 6.45cm、幅 2.84cm、

厚さ 1.87cm、残存重 64.80g である。3 面が研磨されている。

2. 土器（図 5, 写真 11,12）

4 は須恵器である。外面は縄目タタキ、内面には当て具痕が残る。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は内外面とも青灰色（Hue5B5/1）を呈する。器壁の厚さなどからみて甕などの大型器種であるものと考えられる。

Ⅳ. 考察

浦海遺跡出土遺物の中で特筆される遺物は、長さ 28.8cm に及ぶ長大な磨製石斧である。帰属時期は弥生時代以降にこのような形態・寸法の磨製石斧が存在しない点、サヌカイト製礫器や黒曜石剥片が採集されていることから縄文時代であると考えられる。壱岐島内で調査された縄文時代遺跡の中で、磨製石斧が出土した遺跡としては松崎遺跡（田中 2003）、鎌崎海岸遺跡（横山・田中 1979）、名切遺跡（安楽・藤田編 1985）が挙げられるが、いずれの遺跡でも 20cm を越える磨製石斧の出土は確認されていない。

長崎県内における縄文時代磨製石斧の変遷については川道寛が簡潔に整理したことがある（川道 2005）。しかし、長さ 25cm を越える磨製石斧については数量が少なく、年代的位置についてはこれまで不明瞭であったため、ここで、長崎県内出土例について概観する。

これまで、長崎県内で長さ 25cm 以上の磨製石斧は佐世保市門前遺跡（杉原・松尾・江上 2008）、松浦市姫神社遺跡（村川・井立・樋口 2003）、対馬市佐賀貝塚（正林 1989）などで出土している（図 6）。門前では塞ノ神式から曽畑式までの土器が出土しているが、主体となるのは轟 B 式、西唐津式、曽畑式であるため、縄文時代前期の所産であるものと考えられる。平面形態は撥形（図 6-1,2）と短冊形（図 6-3）が認められる。石材は安山岩や蛇紋岩が用いられる。姫神社資料は採集資料であるため正確な帰属時期は不明である。姫神社では塞ノ神式から坂の下式にいたる時期の縄文土器が出土しているが（樋口・釣田 1951,Mohr and Yosizaki1990）、轟 B 式、西唐津式、曽畑式がまとまって出土しているため、縄文時代前期の所産である可能性が高いものと考えられる。平面形態は撥形で断面形態は平らな楕円形が多い（図 6-4 ～ 6）。石材は頁岩や蛇紋岩が用いられる。佐賀貝塚では鐘崎式から北久根山式・宮下式に至る土器が出土した層から石斧が多量に出土している。長さ 25cm 以上の磨製石斧の形態は撥形（図 6-7,8）と短冊形（図 6-9）が認められる。断面形態は撥形では楕円形、短冊形では側面を面取した定角式（樽形）となる。縄文時代前期のものと比較すると長さに比して厚みが大きい傾向にある。石材は砂岩が用いられる。

以上の長崎県内出土長さ 25cm 以上の磨製石斧と浦海遺跡出土例を比較すると、平面形態、断面形態などから門前や姫神社の撥形磨製石斧に類似することがわかる。このことから、浦海遺跡出土磨製石斧の年代は縄文時代前期の可能性が最も大きいのではないかとみられる。宮内克己は九州縄文時代磨製石斧の刃部幅と重量の相関関係から時期的変遷を追究しているが（宮内 1987）、浦海例に近いのは縄文時代前期及び後期例である。敦賀啓一郎は福岡県出土の磨製石斧の長さと幅の相関について分析した結果、ともに縄文時代前期で最も大きくなる傾向にあることを示している（敦賀 2005）。また、磨製石斧の最大幅と最大厚の相関関係について分析した板倉有大によると、最大幅 9 ～ 10cm、最大

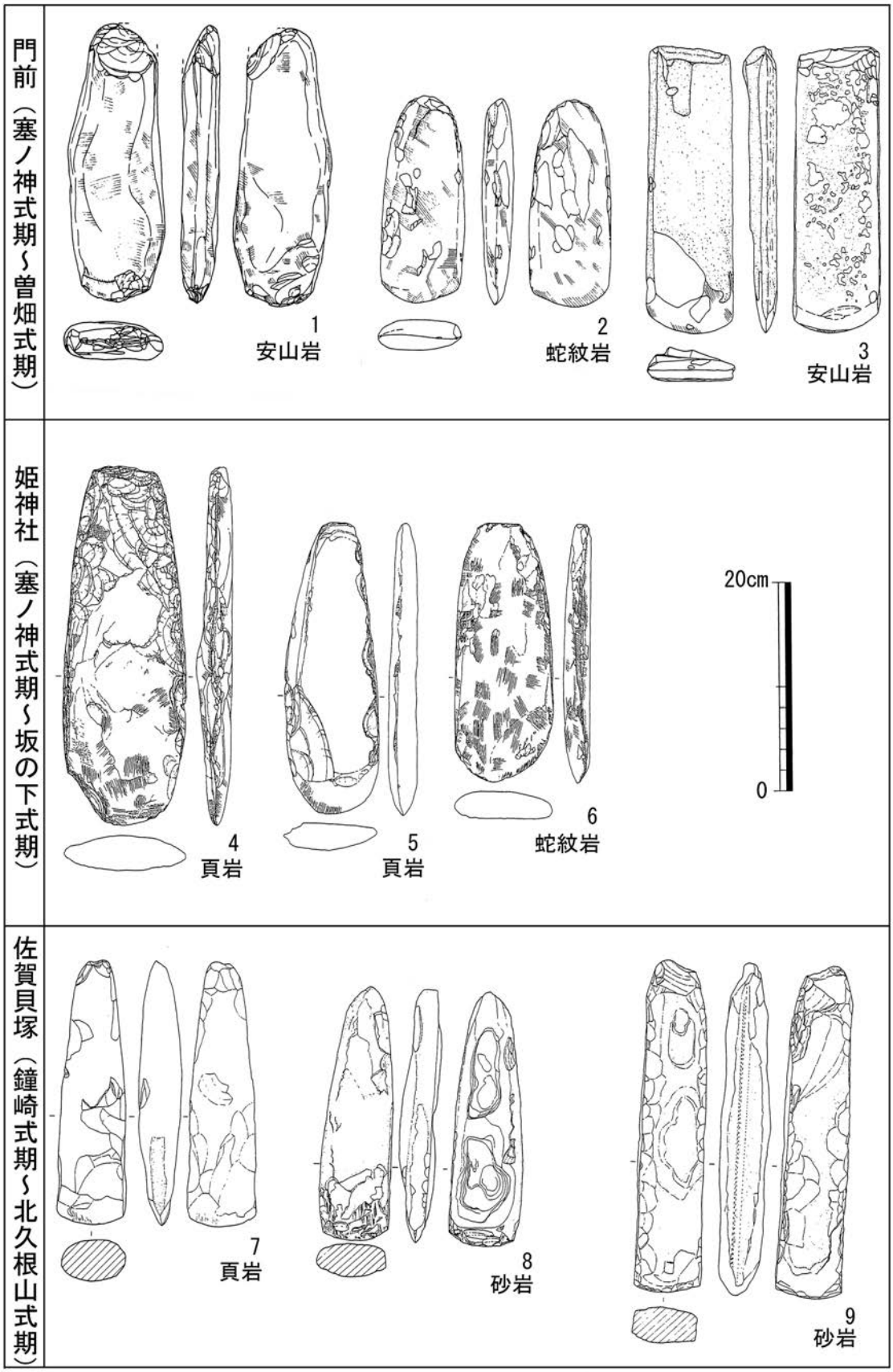


図６　長崎県内出土長大形磨製石斧

厚 3cm 附近に分布がみられるのは縄文時代前期及び中期後葉～後期前葉が該当する（板倉 2006）。以上の磨製石斧の長さ、最大幅、重量等のそれぞれの相関関係の状況は浦海遺跡出土磨製石斧の年代

を縄文時代前期とみるにあたっては整合的である。

但し、帰属時期が縄文時代前期であっても浦海出土磨製石斧の寸法は特別に大きいもので、基部側も刃部様となっているなど一般的な磨製石斧とは異なる点もみられる。実用道具ではなく、儀器や祭祀関連道具であった可能性もある。

このように磨製石斧、サヌカイト製礫器、黒曜石剥片が出土した浦海の遺跡の性格については、資料があまりにも零細でよくわからない。地表調査により知られた壱岐島における縄文時代遺跡の中では、鎌崎（註１）や馬立海岸（古澤 2015）のように黒曜石製石器が採集されるのみで土器がほとんど採集されない遺跡が多くみられる。この土器量に比して石器量が多い遺跡があるという現象は偶然ではないものと思われ、発掘調査が実施された結果、黒曜石製石器のみが出土し、土器が出土しなかった中尾（河合 1998）のような事例も確認されている。このような類型の遺跡は一時的な土地利用が行われたものとみられる（古澤 2014a）。浦海の遺跡としての性格についても、これまで石器のみが出土し、縄文土器が確認されていないことから、壱岐島西海岸に多くみられる一時的利用を示す遺跡の類型に該当する可能性がある。

このように考えた場合、居住域本体の候補としては、同じ湯本湾沿いの南東方約 1.5km に所在する松崎が想定される。松崎では田村式、早期末条痕文土器、西之薗式、轟Ｂ式、西唐津式、曽畑式Ⅱ式、春日式、並木式、坂の下式、鐘崎式、北久根山式が確認されている。貝層が確認されているが、貝層からは曽畑式土器および阿高式系土器を主体とする土器片が出土しており阿高式系土器の時期に最終的に形成されたものとみられる。遺跡利用のピークは曽畑式期と坂の下式期に求められる。上述したとおり浦海出土磨製石斧の年代が縄文時代前期であった場合は、松崎の遺跡利用のピークとほぼ一致し、相互の関係が想定される。浦海磨製石斧が祭祀等の精神文化に関係性があるとすると、松崎の集落の人々にとって浦海が特別な場所だった可能性がある。

なお、中山清隆は玄界灘・日本海沿岸の大型石斧と韓半島の大型石斧を対比したことがある。大型石斧が北部九州では埋納・デポに関係する一方、韓半島では副葬されるという扱われ方の違いに着目し、精神文化の根底ではそれぞれの伝統的な埋葬・祭祀の方法があったと指摘している（中山 1992）。この指摘は筆者が偶像・動物形製品から日韓間で精神文化の交流がほとんどみられないと指摘したこと（古澤 2014b）と整合的である。

韓半島では春川校洞（金元龍 1962,1963,1968）で長さ 40.8cm の大型磨製石斧が、蔚珍厚浦里（죄종규・김상면 1991）で最大長さ 54.2cm にも及ぶ多量の大型磨製石斧が発見されているが、浦海例とは形態や厚さなどが異なり、相互の関係はないものと考えられる。

Ⅴ．結語

本稿では壱岐市勝本町に所在する浦海遺跡採集資料について紹介するとともに、出土した磨製石斧についての諸問題について検討した。その結果、当該磨製石斧は形態・寸法から縄文時代前期の所産である可能性があること、儀器や祭祀道具など精神文化関連遺物である可能性があること、浦海遺跡が一時的利用により残された遺跡であり、松崎遺跡との関係を考える必要があること、韓半島の大型磨製石斧とは関連性が薄いことなどを指摘した。地表調査により得られた資料ではあるが、特異な磨製石斧が出土しているという点で、浦海遺跡資料は重要であり、今後の関連資料の増加を期待したい。

本稿をなすにあたって、須藤正人館長、川道寛東アジア考古学研究室長からご教示、図面等のご協力を賜りました。記して感謝いたします。

註1　鎌崎と名切は一体の遺跡であるが、名切では土器が多く、鎌崎では石器が多いという指摘（横山 1990）がある。

【文献】

〈日文〉

安楽勉・藤田和裕編 1985『名切遺跡』長崎県文化財調査報告書第 71 集

石井泰義・鎌田泰彦 1965「壱岐及び対馬の地形と地質」『壱岐・対馬自然公園学術調査報告書』日本自然保護協会調査報告第 19 号

板倉有大 2006「磨製石斧からみた九州縄文時代前期以降の生業・居住動態」『日本考古学』21

河合雄吉 1998『中尾遺跡』石田町文化財調査報告書第 2 集

川道寛 2005「長崎県における縄文時代の磨製石斧」『Stone Sources』 5

佐原真 1977「石斧論 - 横斧から縦斧へ -」『松崎寿和先生退官記念 考古論集』

佐原真 1982「石斧再論」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』

正林護 1989『佐賀貝塚』峰町文化財調査報告書第 9 集

杉原敦史・松尾秀昭・江上正高 2008『門前遺跡Ⅱ』長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書第 4 集

田中聡一 2003『松崎遺跡』勝本町文化財調査報告書第 11 集

敦賀啓一郎 2005「福岡県における縄文時代の石斧 - 磨製石斧を中心として -」『Stone Sources』 5

長崎県教育委員会 1994『長崎県遺跡地図 - 壱岐地区 -』長崎県文化財調査報告書第 112 集

長崎県神職会壱岐支会 1941『壱岐国神社誌』

中山清隆 1992「玄海・日本海をめぐる大型石斧」『季刊考古学』38

樋口隆康・釣田正哉 1951「平戸の先史文化」『平戸学術報告』京都大学平戸学術調査団

古澤義久 2014a「玄界灘島嶼域を中心にみた縄文時代日韓土器文化交流の性格 - 弥生時代早期との比較 -」『東京大学考古学研究室研究紀要』28

古澤義久 2014b「東北アジア先史時代偶像・動物形製品の変遷と地域性」『東アジア古文化論攷 1』

古澤義久 2015「壱岐市郷ノ浦町馬立海岸遺跡採集資料」『島の科学』52

宮内克己 1987「磨製石斧小考」『東アジアの考古と歴史 中 岡崎敬先生退官記念論集』

村川逸朗・井立尚・樋口健太郎 2003『供養川遺跡』長崎県文化財調査報告書第 174 集

横山順 1990「壱岐の古代と考古学」『海と列島文化 3 玄界灘の島々』小学館

横山順・田中良之 1979「壱岐・鎌崎海岸遺跡について」『九州考古学』54

Mohr,A and Yosizaki,M（水ノ江和同訳）1990「西九州における文化の変遷」『古文化談叢』22

〈韓文〉

金元龍 1962「春川校洞 穴居遺蹟 発見遺物 - 校洞文化의 性格 -」『考古美術』3-12

金元龍 1963「春川校洞 穴居遺蹟과 遺物 - 校洞文化의 性格과 年代 -」『歴史学報』20

金元龍 1968「春川 校洞 穴居遺蹟出土 遺物」『考古学』1

최종규・김상면 1991『蔚珍厚浦里遺蹟』国立慶州博物館

写真１　浦海遺跡遠景

写真２　浦海遺跡近景

写真３　浦海遺跡海岸部玄武岩

写真４　浦海遺跡印判手蓋出土状況

写真５　磨製石斧正面

写真６　磨製石斧背面

写真７　磨製石斧側面１

写真８　磨製石斧側面２

写真９　磨製石斧刃部平面

写真 10　磨製石斧基部平面

写真 11　浦海遺跡出土遺物正面

写真 12　浦海遺跡出土遺物背面

長崎県埋蔵文化財センター
研究紀要　第５号
2015 年３月

頭ヶ島白浜遺跡（平成７年度範囲確認調査）TP9（第９試掘坑）出土遺物

白石　渓冴

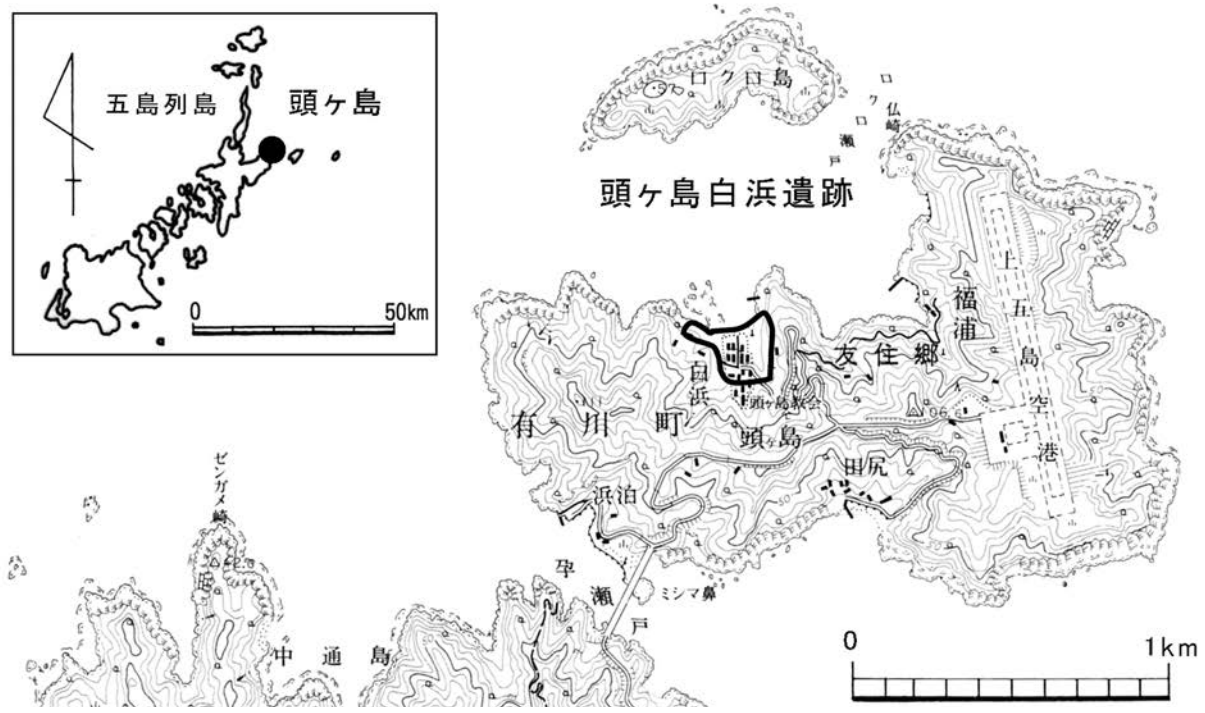


図１　頭ヶ島白浜遺跡位置図（S ＝ 1／25000）

はじめに

長崎県では、これまで「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の世界遺産登録を目指す取り組みが継続されてきた。平成 26 年９月 17 日には、政府から国連教育科学文化機関（ユネスコ）に「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」（長崎、熊本県）の世界文化遺産登録を推薦することが決定され、同年９月 22 日にはユネスコ世界遺産センターへ推薦書（暫定版）が提出され、世界遺産登録に向けて着実に前進している（平成 27 年１月現在）。「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は 14 件の資産で構成されるが、このうちのひとつとして頭ヶ島天主堂がある。今回、世界遺産登録を目指す取り組みの一環として、頭ヶ島天主堂とその周辺の景観を改善するために、新上五島町世界遺産推進室によって無電柱化工事が行われることなった。この白浜地区無電柱化事業に係る範囲は、遺物包含地および墳墓に指定されている。（図１）

頭ヶ島白浜遺跡では過去に、３回の発掘調査がなされている。昭和 42 年（1967 年）に別府大学・長崎大学によって緊急発掘調査が実施され、縄文時代の人骨や土器が出土している。平成７年には、２月 14 日から２月 18 日までの４日間にわたって、範囲確認調査が行われ、これを受けて、平成７年５月 15 日から平成７年６月 16 日にかけて、本調査を実施されている。この本調査においては、縄文時代前期前葉（轟Ｂ式）から縄文時代後期前葉（坂の下）にかけての土器に加え、韓国新石器時代早期彩色土器が出土し、また近世墓がまとまって検出された（古門 1996）。

さて、今回資料紹介するのは、平成７年の範囲確認調査において出土した資料である。この調査に

おいては TP1 ～ TP11 の 11 箇所の 2m × 2m の試掘坑が設定され、この中に、砂丘の丘陵の頂上部に近い傾斜地に設定された TP9 という試掘坑がある（図２）。この地点は上記の白浜地区無電柱化事業に係る工事範囲に程近く、この TP9 において明確な遺物包含層が確認されているかどうかが、開発に先立つ本調査実施の必要性を判断する根拠となる。平成７年の本調査の報告書においては、「TP9 は頂部に近い傾斜地であるが、暗褐色砂質土層からは後期の粗製無文土器が多く出土した」（古門 1996）とあり、この報告書と、長崎県埋蔵文化財センターが保管している当時の調査記録を参照して、開発行為の前に本調査が実施されることとなった（註１）。

この TP9 から出土した遺物については現在、新上五島町教育委員会文化財課が保管している。上記の経緯によって、TP9 出土遺物について観察する中で、後述するように、これまで頭ヶ島白浜遺跡において確認されてこなかった時期の遺物群であることが明らかとなった。新上五島町教育委員会の承諾を得て、今回紀要において紹介することとなった。

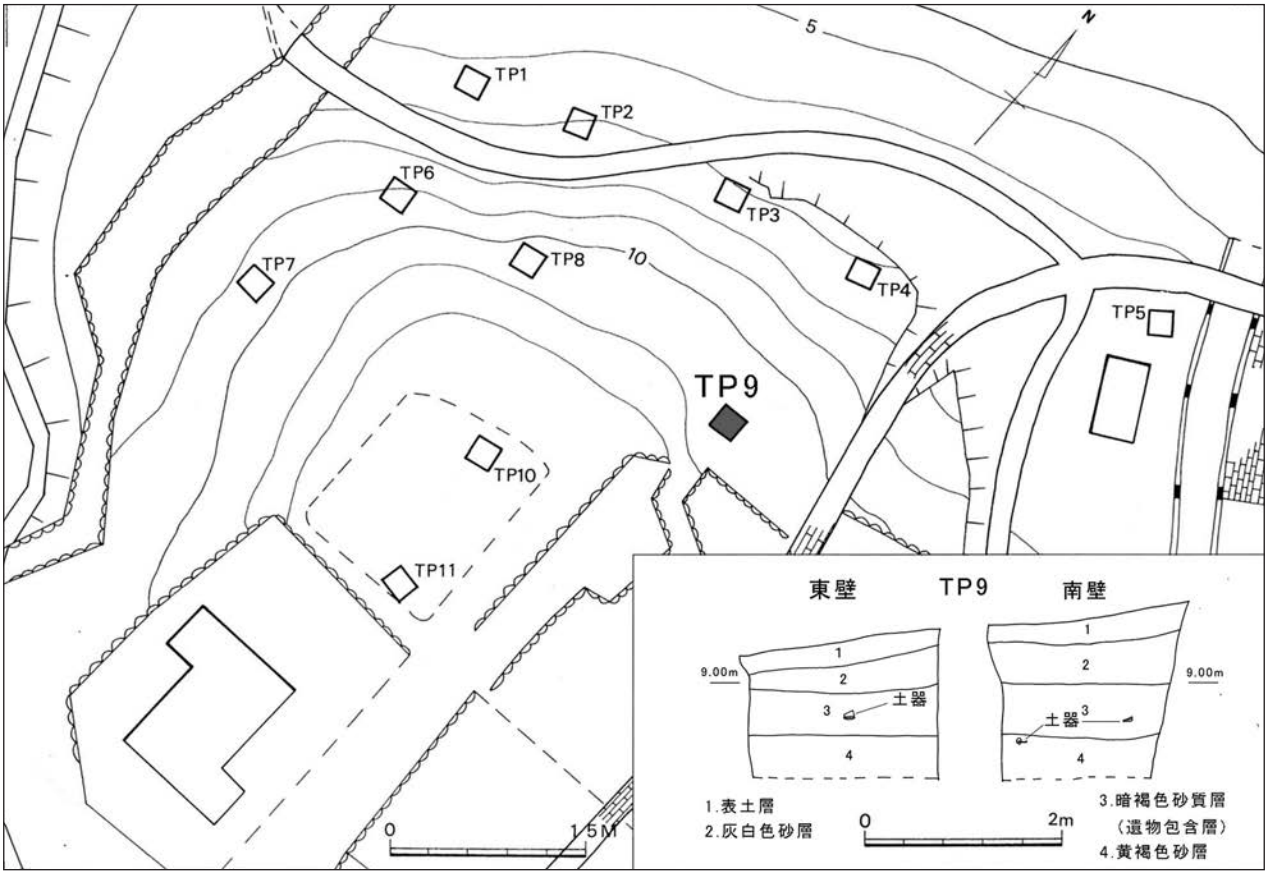


図２　1995 年実施試掘調査試掘坑配置図（S ＝ 1／600）及び TP9 土層図（S ＝ 1／80）

TP9 の層位について

土層図の原図に土層についての記載がなく、層位については報告書の作成時に記録された、土層注記が残されるのみである。

1層：表土層

2層：灰白色砂層

3層：暗褐色砂質層（遺物包含層）

4層：黄褐色砂層

3層の暗褐色砂質層は遺物包含層であり、後述するようにこれが今回紹介する縄文時代後期後半の遺物を包含する層である。4層は黄褐色砂層であり、ここからも縄文土器1点が出土したことが記録されている（註2）。

出土状況

上記のように、3層の遺物包含層において出土している。出土状況を記録した写真を見る限り、3層の中でも、ほぼ同一のレベルにおいて集中して出土していることがわかる。

図3－1　TP9 遺物出土状況①

図3－2　TP9 遺物出土状況②

平成7年調査（TP9）出土遺物

TP9からは、土器の微細片を含めて、48点の遺物が出土している。このうち、報告にたえる30点の遺物について報告を行う。土器27点、石器3点である。

土器

土器の口縁部片が5点、胴部片は22点である。土器は器面調整と焼成の状態、および胎土の質の違いによって大きく第1類・第2類と、前者とまったく様相の異なる第3類に分けられる。

第1類土器と第2類土器は、胎土と焼成および器面調整によって分けられる。全て粗製の深鉢であり、施文したものはない。第1類土器は、胎土が緻密であり、混和材をほとんど含まず、焼成が良好である。第2類土器は、胎土自体は緻密であり混和材をほとんど含まないが、空隙が非常に多い。また､焼成が非常に良好で硬質である。第1類､第2類はどちらも､内外面ともに貝殻条痕を施した後に、板状工具によるナデ調整を施す、特に胴部の下端においては板状工具によるナデ調整を入念に施すという基本的な調整は同じである。しかしながら、第1類土器が外面を入念にナデるのに対して、第2類土器は内面を入念にナデる、という特徴がある。土器の部位や、個体差によって相違はあるが、主に胎土と焼成によって以上のように分類した。第3類土器については後述する。

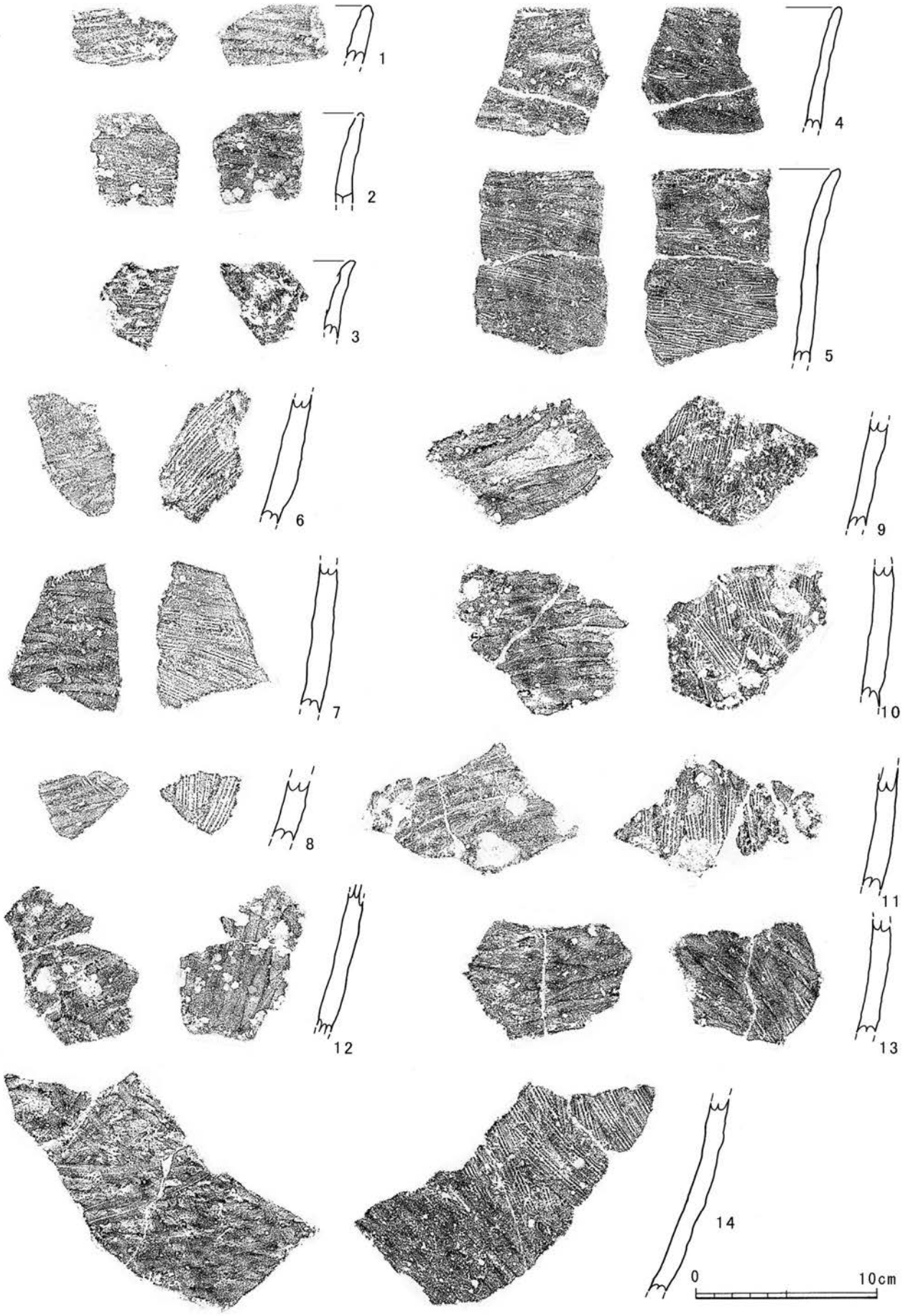


図４　TP9 第３層出土土器実測図①（S ＝ 1／3）

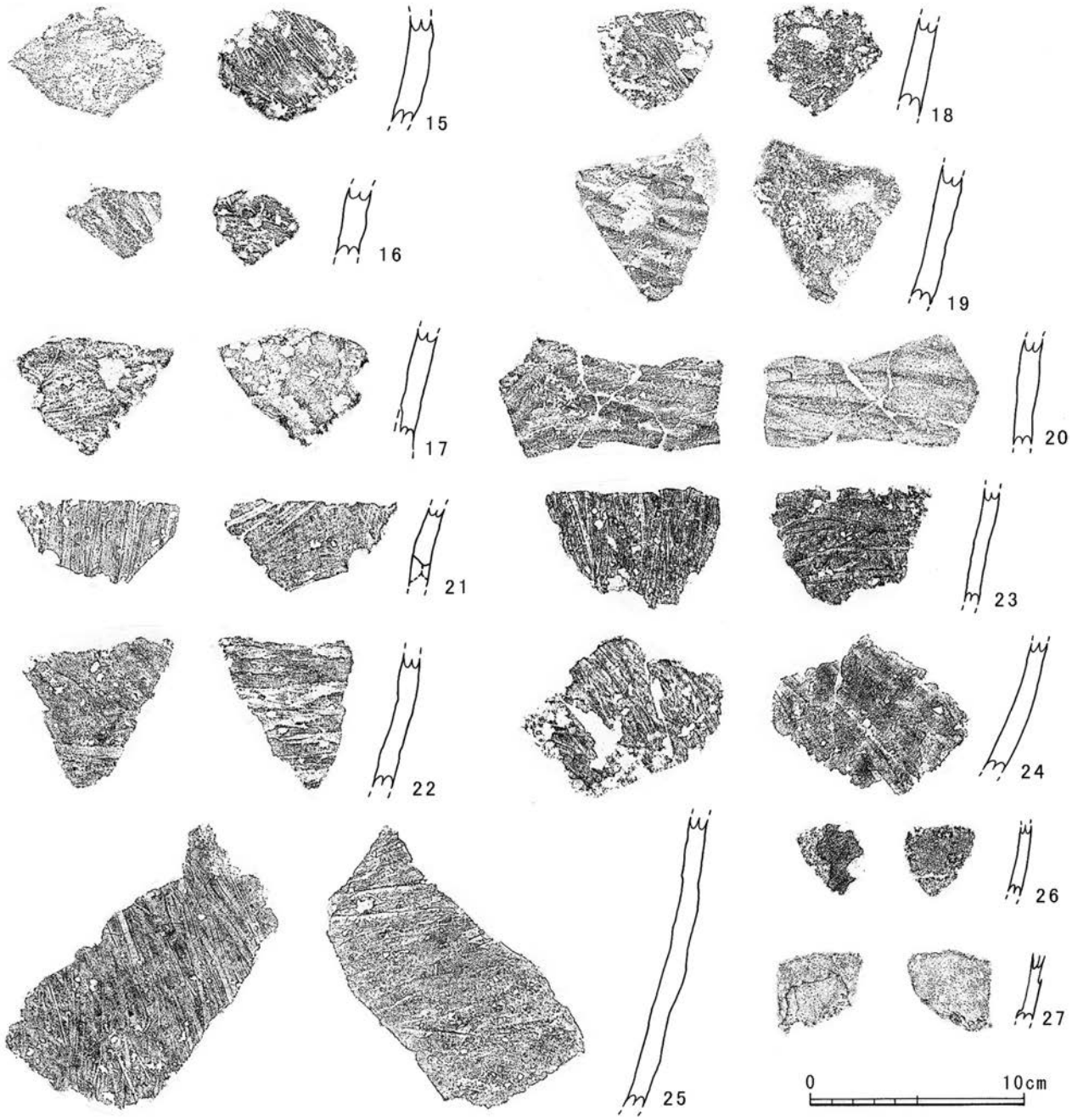


図５　TP9 第３層出土土器実測図②（S ＝ 1／3）

第１類土器（1 ～ 20,27）

１～５は口縁部である。外側に緩く広がりながら直線的に立ち上がる。

１は、器壁がやや厚く、口縁端部までほぼ同じ厚みをもつ。内外面ともに板状工具によるナデが施される。内面から口縁端部にかけては、最大幅 10mm の板状工具によるナデの痕跡が見られるのに対して、外面は板状工具の痕跡は内面ほど明瞭には見られず、貝殻条痕を残す。

２、３は口縁端部にかけて少しずつ厚みを減じ、口唇部はやや尖っている。内外面ともに貝殻によるナデの後に板状工具による横方向のナデを施す。２の外面は口縁端部まで貝殻条痕が強く残るのに対して、３の外面は板状工具によってナデ消す。３には内外面からの穿孔が見られ、補修孔であると考えられる。器面調整がやや異なるが、焼成や胎土から同一個体の可能性がある。

４、５は口縁端部に向かって緩やかに外反しながら立ち上がり、口唇部がやや尖る。貝殻条痕の後

に板状工具によってナデる。4はナデによって貝殻条痕がほとんどナデ消されるが、5は特に内面において、胴部に近いほど貝殻条痕が明瞭に残される。焼成や胎土から、同一個体の可能性がある。

6～19は、胴部片である。6～14は外面に板状工具によるナデを施し、内面には貝殻条痕を明瞭に残す。このうち12～14については、内面においても貝殻条痕を強くナデ消す。14では内面において、板状工具によるナデが貝殻条痕をナデ消す様子が確認されることから、底部に近い位置で入念に板状工具によるナデが施されていることが確認される。

15～19は、内面あるいは外面において、器壁の摩滅や剥落が進み、器面調整の観察が難しい資料である。しかし焼成や胎土の特徴、およびおおむね外面を板状工具によって強くナデ、内面に貝殻条痕を施すといった特徴から、第1類に分類されると判断される。20は、内面外面ともに板状工具によって強くナデる。貝殻条痕が見られないことから、他の第1類土器とやや異なっている。器壁が全体的に外反することから、口縁部と胴部の境の屈曲部やや上方であると考えられる。

26は、器壁がほとんど剥落することから、器面調整については不明である。しかし、焼成の状態や胎土の観察から、上述の第1類～第3類土器のなかでは、第1類土器に最もよく似ており、第1類土器であると判断される。植物の圧痕が見られる（後述。図9－1～9－6）。

第2類土器（21～25）

21は器壁が全体的に外反することから、口縁部付近であると考えられる。内外面に貝殻条痕が明瞭に見られる。内外面からの穿孔が見られ、補修孔であると考えられる。22～25は外面に貝殻条痕が明瞭に見られ、内面には貝殻条痕後、板状工具によって強くナデる。特に22では板状工具によるナデが強く施され、ケズリを施したかのように器壁に凹凸が見られる。

第3類土器（26）

26は、胴部片と考えられる小片である。器面調整は、外面はミガキ、内面は剥落のため不明である。胎土には混和材として砂が多く用いられやや粗雑である。石英・長石のほかに角閃石が含まれる。器壁は4～5mm程度と薄く、この点においても第1類・第2類土器とは異なっている。外面は赤褐色（Hue2.5YR4/8）を呈する。

表1　TP9出土土器観察表

番号	時期	器種	部位	色調（外面）		色調（内面）		焼成	胎土	調整（外面）	調整（内面）
				色	Hue	色	Hue				
1	縄文時代後期後半～後期末	粗製深鉢	口縁部	橙	Hue5YR6/6	明赤褐	Hue5YR5/6	良好（やや甘い）	緻密。雲母片と長石をごくわずかに含む。	貝殻条痕（横）→ナデ（横）	ナデ（横）
2	〃	〃	〃	橙	Hue5YR6/6	にぶい黄橙	Hue5YR6/4	良好	緻密。雲母片と長石をごくわずかに含む。	貝殻条痕（横）→ナデ（横）	貝殻条痕（横）→ナデ（横）
3	〃	〃	〃	橙	Hue5YR6/8	橙	Hue5YR6/6	良好	緻密。雲母片・角閃石・長石をごくわずかに含む。	貝殻条痕（横）	調整不明（剥落）
4	〃	〃	〃	橙	Hue5YR6/6	にぶい橙	Hue5YR6/4	良好（やや甘い）	緻密。雲母片と長石をごくわずかに含む。	貝殻条痕（横）→ナデ（横）	貝殻条痕（横）→ナデ（横）
5	〃	〃	〃	橙	Hue5YR6/6	橙	Hue5YR6/6	良好（やや甘い）	緻密。雲母片・角閃石・長石をごくわずかに含む。	貝殻条痕（横）→ナデ（横）	貝殻条痕（横）→ナデ（横）
6	〃	〃	胴部	橙	Hue5YR6/6	橙	Hue7.5YR7/6	良好（やや甘い）	緻密。雲母片と角閃石をごくわずかに含む。	ナデ（横）	貝殻条痕（縦）
7	〃	〃	〃	橙	Hue5YR6/6	にぶい褐	Hue7.5YR5/4	良好	緻密。雲母片と角閃石をごくわずかに含む。	ナデ（横）	貝殻条痕（横）→ナデ（横）
8	〃	〃	〃	にぶい橙	Hue7.5YR6/4	にぶい黄橙	Hue10YR6/3	良好	緻密。雲母片をごくわずかに含む。	ナデ（横）	貝殻条痕（縦）
9	〃	〃	〃	にぶい赤褐	Hue5YR5/4	にぶい褐	Hue7.5YR5/4	良好（やや甘い）	緻密。雲母片と角閃石をごくわずかに含む。	ナデ（横）	貝殻条痕（縦）
10	〃	〃	〃	明赤褐	Hue5YR5/8	にぶい黄橙	Hue10YR6/3	良好（やや甘い）	緻密。雲母片・角閃石・長石をごくわずかに含む。	ナデ（横）	貝殻条痕（縦）
11	〃	〃	〃	橙	Hue5YR6/6	橙	Hue5YR7/8	良好（やや甘い）	緻密。雲母片・角閃石・長石をごくわずかに含む。	ナデ（横）	貝殻条痕（縦）
12	〃	〃	〃	橙	Hue5YR6/6	にぶい黄橙	Hue10YR6/3	良好（やや甘い）	緻密。雲母片・角閃石・長石をごくわずかに含む。	ナデ（横）	ナデ（縦）
13	〃	〃	〃	橙	Hue5YR6/6	明黄褐	Hue10YR6/6	良好（やや甘い）	緻密。雲母片・角閃石・長石をごくわずかに含む。	ナデ（横）	貝殻条痕（縦）→ナデ（ナナメ）
14	〃	〃	〃	橙	Hue5YR6/6	にぶい黄橙	Hue10YR7/4	良好	緻密。雲母片・角閃石・長石をごくわずかに含む。	ナデ（横）	貝殻条痕（縦）→ナデ（ナナメ）
15	〃	〃	〃	橙	Hue5YR6/6	橙	Hue7.5YR6/6	良好（やや甘い）	緻密。雲母片・角閃石・長石をごくわずかに含む。	不明。ナデ（横）か	貝殻条痕（ナナメ）
16	〃	〃	〃	橙	Hue5YR6/6	橙	Hue5YR7/6	良好（やや甘い）	緻密。雲母片と長石をごくわずかに含む。	ナデ（ナナメ）	貝殻条痕（ヨコ）→ナデ？
17	〃	〃	〃	橙	Hue5YR6/6	にぶい褐	Hue7.5YR5/4	良好（やや甘い）	緻密。雲母片と長石をごくわずかに含む。	貝殻条痕（横）→ナデ？	貝殻条痕（ヨコ）→ナデ？
18	〃	〃	〃	橙	Hue5YR6/6	橙	Hue5YR7/6	良好（やや甘い）	緻密。雲母片・角閃石・長石をごくわずかに含む。	貝殻条痕（ナナメ）	ナデ（ナナメ）？
19	〃	〃	〃	にぶい橙	Hue7.5YR6/4	橙	Hue5YR6/6	良好（やや甘い）	緻密。雲母片と長石をごくわずかに含む。	ナデ（横）	ナデ？
20	〃	〃	〃	灰黄褐	Hue10YR4/2	にぶい黄橙	Hue10YR6/4	良好	緻密。雲母片と長石をごくわずかに含む。	ナデ（横）	ナデ（横）
21	〃	〃	〃	灰黄褐	Hue10YR5/2	にぶい黄橙	Hue10YR6/3	非常に良好	緻密。長石をごくわずかに含む。	貝殻条痕（縦）	貝殻条痕（ナナメ）
22	〃	〃	〃	明赤褐	Hue5YR5/6	明赤褐	Hue5YR5/6	非常に良好	緻密。微細な雲母片と長石をごくわずかに含む。	貝殻条痕（横）	ナデ（ナナメ）
23	〃	〃	〃	明赤褐	Hue5YR5/6	にぶい黄褐	Hue10YR5/4	非常に良好	緻密。微細な雲母片と長石をごくわずかに含む。	貝殻条痕（縦）	ナデ（横）
24	〃	〃	〃	にぶい褐	Hue7.5YR5/4	にぶい黄橙	Hue10YR6/4	非常に良好	緻密。微細な雲母片と長石をごくわずかに含む。	貝殻条痕（縦）	ナデ（横）
25	〃	〃	〃	にぶい橙	Hue7.5YR5/3	にぶい黄橙	Hue10YR6/3	非常に良好	緻密。微細な雲母片と長石をごくわずかに含む。	貝殻条痕（ナナメ）	ナデ（横）
26	不明	不明	不明	赤褐	Hue2.5YR4/8	黒褐	Hue7.5YR3/1	甘い	粗い。微細な雲母片・長石・石英・角閃石の砂粒を多く含む。	ミガキ	不明（剥落）
27	縄文時代後期後半～後期末	粗製深鉢	不明	にぶい赤褐	Hue5YR5/4	褐	Hue7.5YR4/3	良好	緻密。雲母片と長石をごくわずかに含む。	不明（剥落）	不明（剥落）

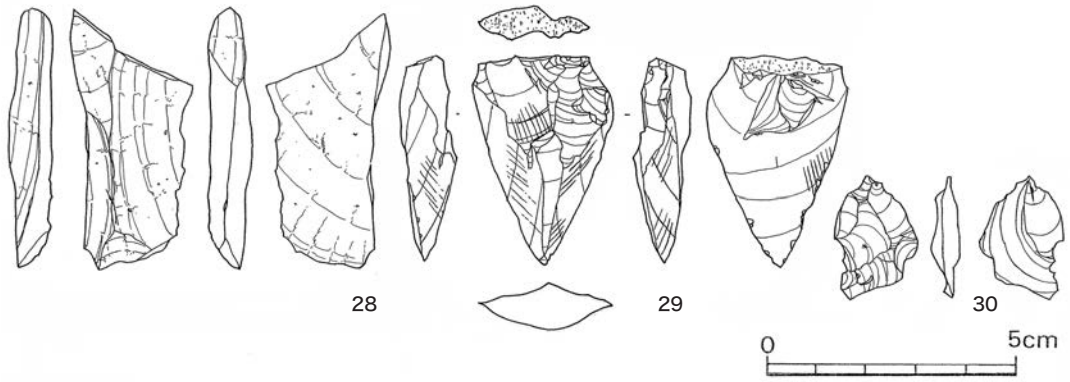


図６　TP9 第３層出土石器実測図（S ＝２／３）

石器

28 は安山岩製の剝片である。打点側と側面が折れて欠損している。29 は腰岳産黒曜石の剝片である。原礫面が角礫状を呈するため、腰岳産と判断される。長さ 3.7cm、最大幅 2.7cm、最大厚 1.0cm、重さ 8.55g を計る。30 は腰岳産黒曜石の砕片である。

表２　TP9 出土石器観察表

番号	時期	石材	（残存）長さ	（残存）幅	最大厚	重さ
28	縄文時代後期後半～後期末	安山岩	5.1cm	2.5cm	0.8cm	9.86g
29	〃	黒曜石	3.7cm	2.7cm	1.0cm	8.55g
30	〃	黒曜石	2.5cm	1.7cm	0.6cm	1.15g

土器の時期について

本資料群は、「後期の粗製無文土器が多く出土した」（古門 1996）とあるように、上述の形態や器面調整、色調といった特徴から、縄文時代後期の資料であることは間違いない。また４、５といった、口縁端部に向かって緩やかに外反しながら立ち上がる口縁部、胴部の半ばから下半にかけて、やや丸みを持つ特徴から、縄文時代後期後葉（三万田式から御領式）の資料であると考えられる。破片資料であり、口縁部下の屈曲部や底部といった、器形を観察し時期決定に有効な部位が残されていないため、これらの土器が属する時期について、これ以上の絞込みは困難である。また、出土状況に関する情報が記載されていないため、不確実さは残る。しかしながら、上記のように出土状況写真（図３）で見る限りまとまって出土している状況が見て取れるため、今回資料紹介する遺物は、この時期のものであると考えて大きな誤りはないと考えられる。

第３類土器について

上記の通り、この土器は外面が赤褐色（Hue2.5YR4/8）であり、外面は入念にミガキが施され、胎土に砂粒を多く含む、また器壁が薄い等の特徴があり、第１類･第２類土器と様子が異なっている。

また、小片であり丹塗りであるのかどうかの判断がつかなかった。このため、蛍光Ｘ線分析装置を用いて、外面と内面との間で器面を構成する胎土の元素に、差異が見られるのかどうかについて確認を行った。この結果、内外面の胎土の元素に差異が見られず、丹塗りは行われていないことが確認された。こうした土器の類例として、五島市に所在する中島遺跡において出土した、内外面が赤褐色を呈し、胎土が良好で、器壁が薄い碗形を呈する土器がある。外面を丁寧にナデ、内面には貝殻条痕

を施す。器壁の暑さは５～ 6mm である（図７）（福江市教育委員会 1987)。27 は内面の器面調整がわからないものの、赤褐色を呈し、器壁が 5mm と薄く、外面に丁寧な調整を行うという点が共通する。また、断面を観察すると器面のみ赤褐色を呈し、ほとんどが黒色を呈するという点においても共通する。

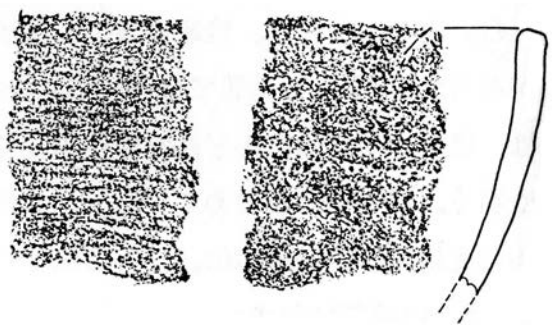


図７　中島遺跡出土赤褐色土器（S=1/2）

土器の胎土について

今回資料紹介する第１類および第２類土器には、以下の特徴が見られる。
①土が緻密であり、混和材が見られない。②硬質である。③器面に孔が多い（図８－１、８－２）。

今回頭ヶ島白浜遺跡の資料紹介にあたり、五島列島地域の中島遺跡から出土した、縄文時代後晩期の土器を実見したところ、中島遺跡においても、頭ヶ島白浜遺跡の資料と同様な、上記①～③の特徴を持つ土器が存在する。（註３）

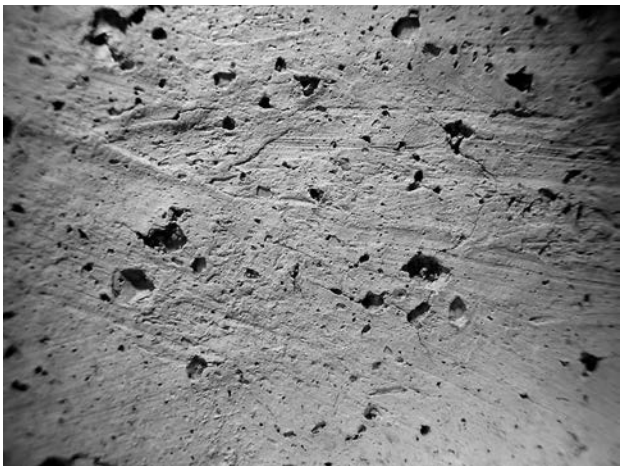


図８－１　第２類土器の器面

図８－２　第２類土器の断面

第１類土器（27）について

土器の断面に圧痕が見られたため、レプリカ法を用いて圧痕をシリコーン樹脂にて反転し、電子顕微鏡を用いて観察を行った（註４）27 の厚さ 7mm の器壁の破断面から検出された（図９－１、９－２）。シリコーン樹脂によって写しとられた圧痕は長さ 7mm 程度、幅 8mm 程度、最大厚 6mm 程度である。図９－３は 10 倍で観察したものである。写真左側は緩やかな弧を描き、頂部はやや右に傾く。写真右側は比較的急な直線を呈する（図９－３）。左側の緩やかな弧を描く部位のほうに視点を動かして観察すると、おおよそ左右の中間に隆起が見られる（図９－４）。図９－５と図９－６は、30 倍で頂部についてそれぞれ図９－３の右側、および真上から観察したものである。おおよそ左右の中間に浅い沈線が見られ、左右は隆起する（図９－５、９－６）（註５）。

図９－１　第１類土器（27）全体写真

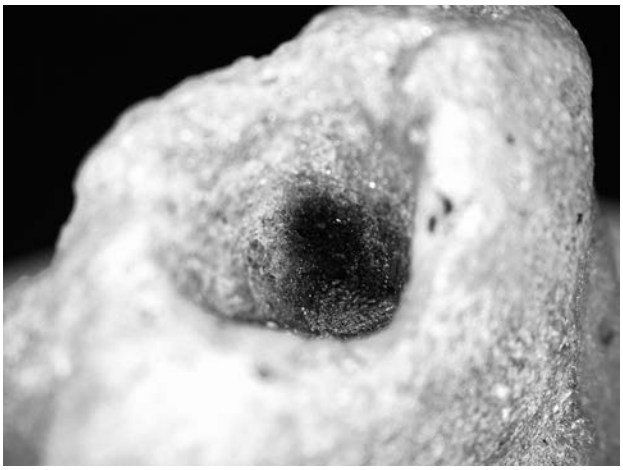


図９－２　第１類土器（27）圧痕部写真

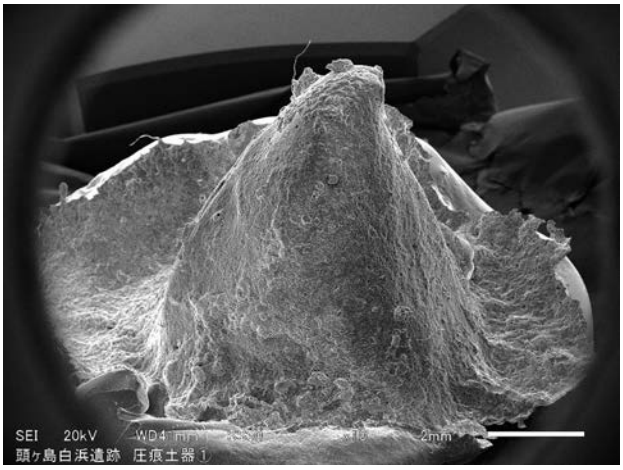


図９－３　（27）電子顕微鏡写真　10 倍－①

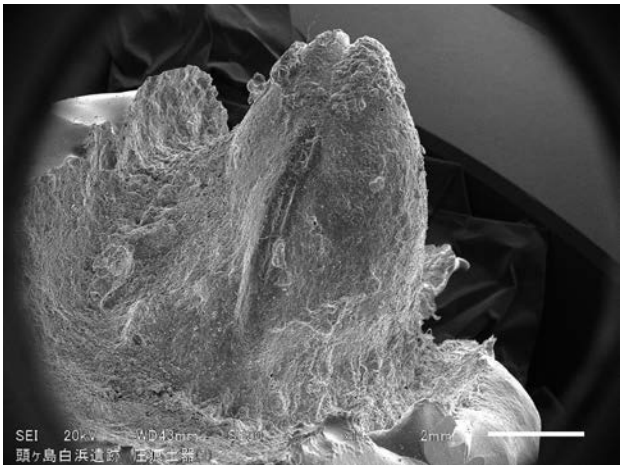


図９－４　（27）電子顕微鏡写真　10 倍－②

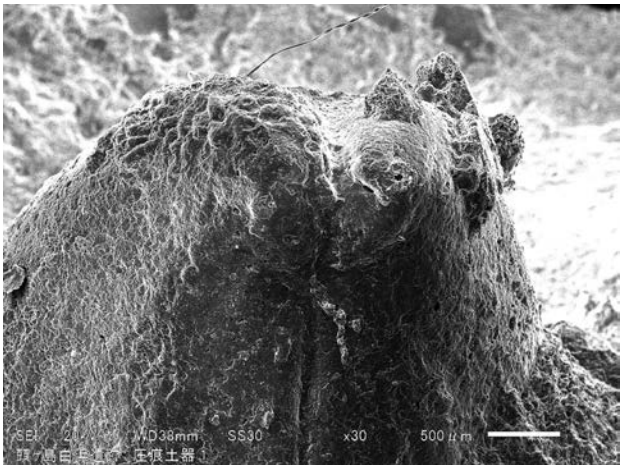


図９－５　（27）電子顕微鏡写真　30 倍－①

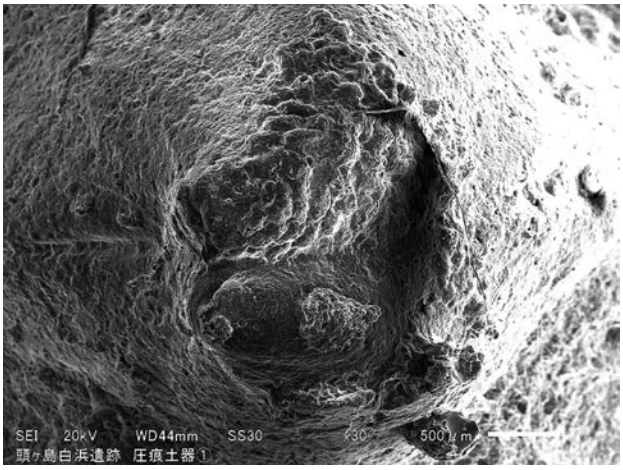


図９－６　（27）電子顕微鏡写真　30 倍－②

まとめ

頭ヶ島白浜遺跡（平成７年度範囲確認調査）の TP9（第９試掘坑）から出土した「後期の粗製の深鉢」と報告される資料について紹介を行った。出土状況から、ある程度時間的にまとまった資料であると判断される。観察の結果、おおよそ縄文時代後期後葉（三万田式から御領式）の資料であると考えられる。五島列島では、三万田式、御領式以降遺跡の分布がまばらとなり、晩期後半段階になって再び遺跡数が増加する、と言われている（正林・塚原 2001）。頭ヶ島白浜遺跡において空白となっていたこの時期にも、人間の活動があったことが明らかになった。井口直司は、黒色磨研土器の粗製土器は地域色が強く、在地から外に出ることなく土着性が強いと述べているが（井口 2012）、本稿で紹介したような特徴的な胎土や器面を持つ土器が、時空間的にどのように広がりを持つのかということが、この時期の人間活動を理解するうえで有効な視点であると考える。今後分析してみたいと考えている。

註

註１　地中にケーブルを埋設するための、7㎡（1m × 7m）の範囲を調査した結果、遺物包含層は確認されなかった。このことから、頭ヶ島白浜遺跡においてはごく近距離を隔てるだけでも、砂の堆積状況は非常に異なることが明らかになった。詳細については長崎県埋蔵文化財調査年報において報告する予定である。

註２　４層（黄褐色砂層）について、平成７年の本調査の報告書（古門 1996）において、黄褐色砂層は縄文時代前期の包含層である。土層図には、壁面付近から土器が１点出土したという記載があり、この記載によると、TP9 出土資料には縄文前期の資料が含まれるということになる。しかしながら、資料紹介する遺物の中からは縄文前期の資料を分別しえず、記録に残された４層出土土器１点について詳細は明らかにしえない。

註３　たとえば混和材については、「混和材は粘土の粘性をほどよく調節するための実効を験すとともに、集団の好みや観念を反映し、土器づくりにおける重要な流儀あるいは伝統を形成する。」という考えがある（小林 1994）。本稿で紹介したような、混和材を含まず、多孔質で硬質の土器についてはこれまであまり注目されていないように思われるが、このような土器の時間・空間的な広がりと、製作技法について研究することが重要であると考えている。

註４　本稿で紹介している頭ヶ島白浜遺跡 TP9 の資料の整理作業を進める過程において、幸運にも小畑弘己熊本大学文学部教授に、別件で長崎県埋蔵文化財センターにお越しいただく機会を得た。頭ヶ島白浜遺跡の資料について、圧痕の有無をご確認いただき、さらにレプリカ法（比佐・片多 2006，小畑 2014）についてのご教示と、本稿で紹介している資料のレプリカを、報告者に実際に作成させていただく、という格別のご厚意を得た。

註５　報告者には何の圧痕であるのかを同定する知識はない。しかしながら形状から、マメ科の植物のサヤである可能性を指摘しておきたい。図９－６に見られるように、頂部には何かがはがれたような痕跡が観察される。マメ科の植物のサヤが植物本体から剥がれ落ちる時の形状ではないかと思うが、実際の植物の観察等から、裏付ける必要があると考えている。

謝辞

まず、資料の紹介を承諾してくださった新上五島町教育委員会に感謝申し上げます。また本稿の作成において、小畑弘己熊本大学文学部教授に御来所いただき、レプリカの作成や土器の胎土についての多く御教示いただきました。記して感謝申し上げます。また、本稿の蛍光X線分析装置を用いた胎土の分析、および電子顕微鏡写真の撮影において、片多雅樹主任文化財保護主事のご協力を得た。また、本稿で使用した図面の作成には、長崎県埋蔵文化財センターの前田加美調査員と、後濱啓太調査員の協力を得た。記して感謝いたします。

引用参考文献

井口直司 2012『縄文土器ガイドブック』新泉社

宇土靖之・大坪芳典 2011「Ⅳ　総括」『小原下遺跡』長崎県島原市教育委員会

河北毅 1986「第Ⅴ章　縄文土器」『伊坂上原遺跡　石佛遺跡』熊本県教育委員会

小林達雄 1994「第６章　縄文土器生態論」『縄文土器の研究』小学館

正林護・塚原博 2001「2. 五島列島の縄文時代」『環東中国沿岸地域の先史文化　第５編』熊本大学文学部

福江市教育委員会 1980『白浜貝塚　福江市文化財調査報告書　第２集』

福江市教育委員会 1987『中島遺跡　福江市文化財調査報告書　第３集』

水ノ江和同 1997「北部九州の縄紋後・晩期土器ー三万田式から刻目突帯文土器の直前までー」『縄文時代』第８号　縄文時代文化研究会

山崎純男・島津義昭 1994「九州の土器」『縄文文化の研究４縄文土器Ⅱ』雄山閣

長崎県埋蔵文化財センター
研究紀要　第５号
2015 年３月

判別図法を用いた黒曜石の産地推定
～原産地データの蓄積～

片多　雅樹

Ⅰ．はじめに

長崎県埋蔵文化財センターでは、長崎県内の遺跡から出土した黒曜石製石器の原産地を推定する試みを始めている。出土資料の分析に先立ちセンターに導入されているエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置を用いて、主に九州圏内の黒曜石原産地から採集してきた黒曜石原石を分析し、望月明彦氏が考案した判別図法を用いて原産地の違いが分析データ判別図上で区分できるかデータの蓄積を行った。

Ⅱ．装置の仕様と分析条件

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（SSI ナノテクノロジー社製：SEA1200VX)。下面照射式で照射径は 8mm Φ。Rh（ロジウム）管球、SDD 検出器で液体窒素を要しない。分析条件は管電圧 40kV で管電流は抵抗値によって自動設定とした。大気雰囲気で、測定時間 100 秒で分析を行った。

写真１　分析装置

写真２　試料室内

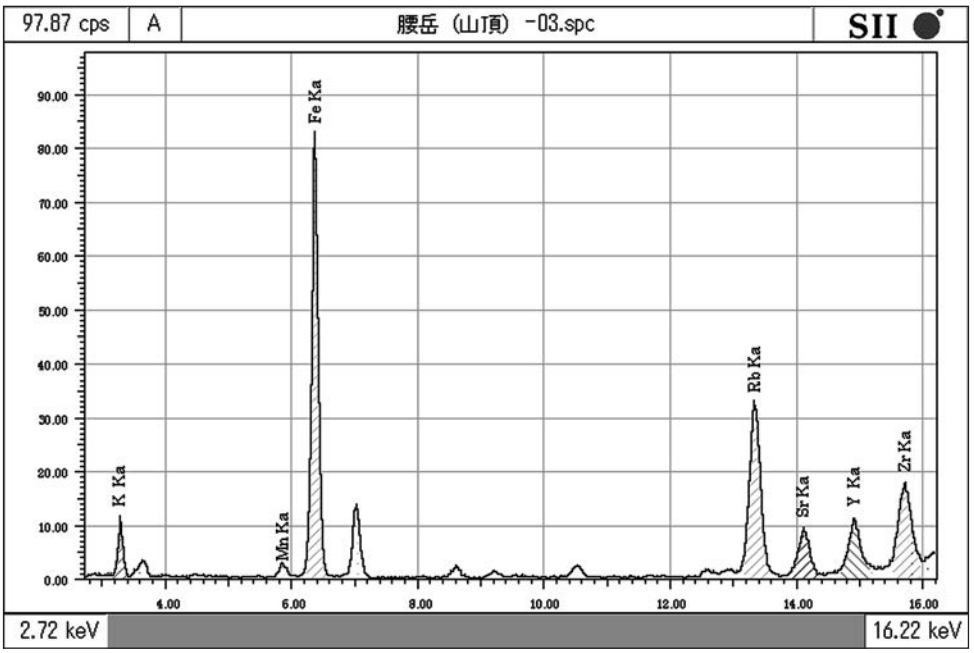


図１　分析スペクトルの一例（腰岳）

Ⅲ．判別図の作成

検出した元素のうち、K（カリウム）、Mn（マンガン）、Fe（鉄）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）、Y（イットリウム）、Zr（ジルコニウム）の７元素のＸ線強度（cps 値）から下記の式によって求められる４つのパラメータを用いて、２種類の散布図（判別図）を作成する。

① Rb 分率＝｛Rb 強度× 100/（Rb 強度＋ Sr 強度＋ Y 強度＋ Zr 強度)｝

② Sr 分率＝｛Sr 強度× 100/（Rb 強度＋ Sr 強度＋ Y 強度＋ Zr 強度)｝

③ Mn 強度× 100/ 鉄強度

④ Log（Fe 強度 /K 強度）

Ⅳ．分析試料

黒曜石原産地の基準試料として、九州圏内原産地 16 個所から採集された黒曜石原石を分析に供した（図２、表１）。

分析に供した試料は、風化などによる分析値への影響をなくすため巧打により破砕し、フレッシュな破断面を分析した。原石はそれぞれの原産地試料から２～６固体分析している。

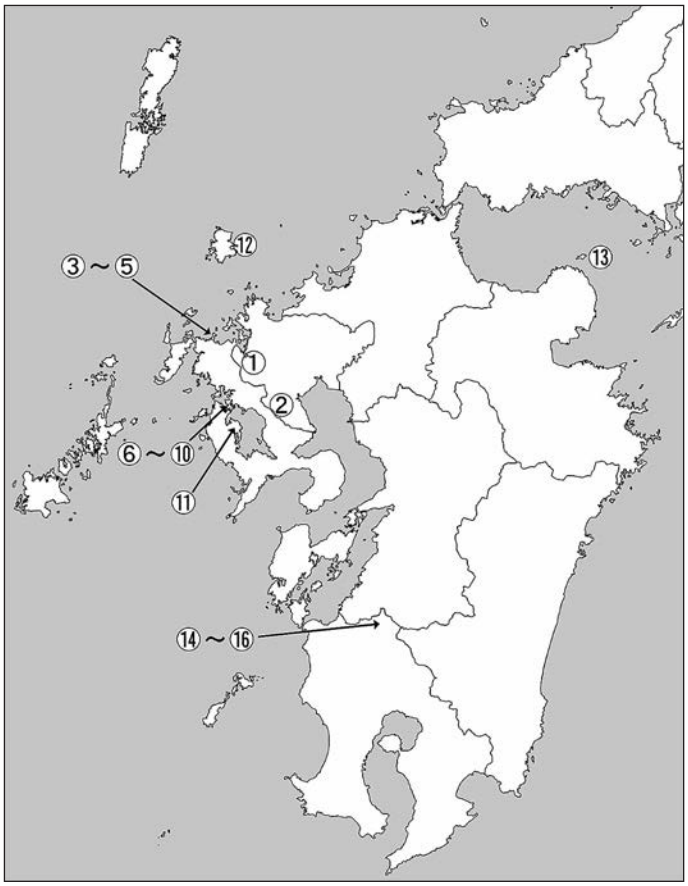


図２　分析に供した黒曜石採集地

表１　分析に供した黒曜石一覧

	名　称	採集地	
1	腰岳	佐賀県	伊万里市
2	椎葉山荘	佐賀県	嬉野市
3	星鹿半島牟田	長崎県	松浦市
4	星鹿半島大崎	長崎県	松浦市
5	松浦大崎	長崎県	松浦市
6	土器田	長崎県	佐世保市
7	小鯛	長崎県	佐世保市
8	古里海岸	長崎県	佐世保市
9	針生電波塔	長崎県	佐世保市
10	東浜	長崎県	佐世保市
11	亀岳	長崎県	西海市
12	壱岐	長崎県	壱岐市
13	姫島	大分県	東国東郡
14	日東	鹿児島県	伊佐市
15	五女木	鹿児島県	伊佐市
16	上青木	鹿児島県	伊佐市

Ⅴ．分析結果

分析結果から得られたデータをもとに作成した判別図を図３（Rb分率 vs Mn強度×100/Fe強度）、図４（Sr分率 vs logFe/K強度）に示す。姫島、亀岳、上青木、壱岐は他原石とは固有の場所にプロットされた。また腰岳と星鹿半島牟田、土器田と東浜、日東と五女木は限られた範囲にプロットされるが、それぞれプロット場所が重なっている。そのほかに関してはプロットされる範囲が広くまた他データとの重なりも多い。

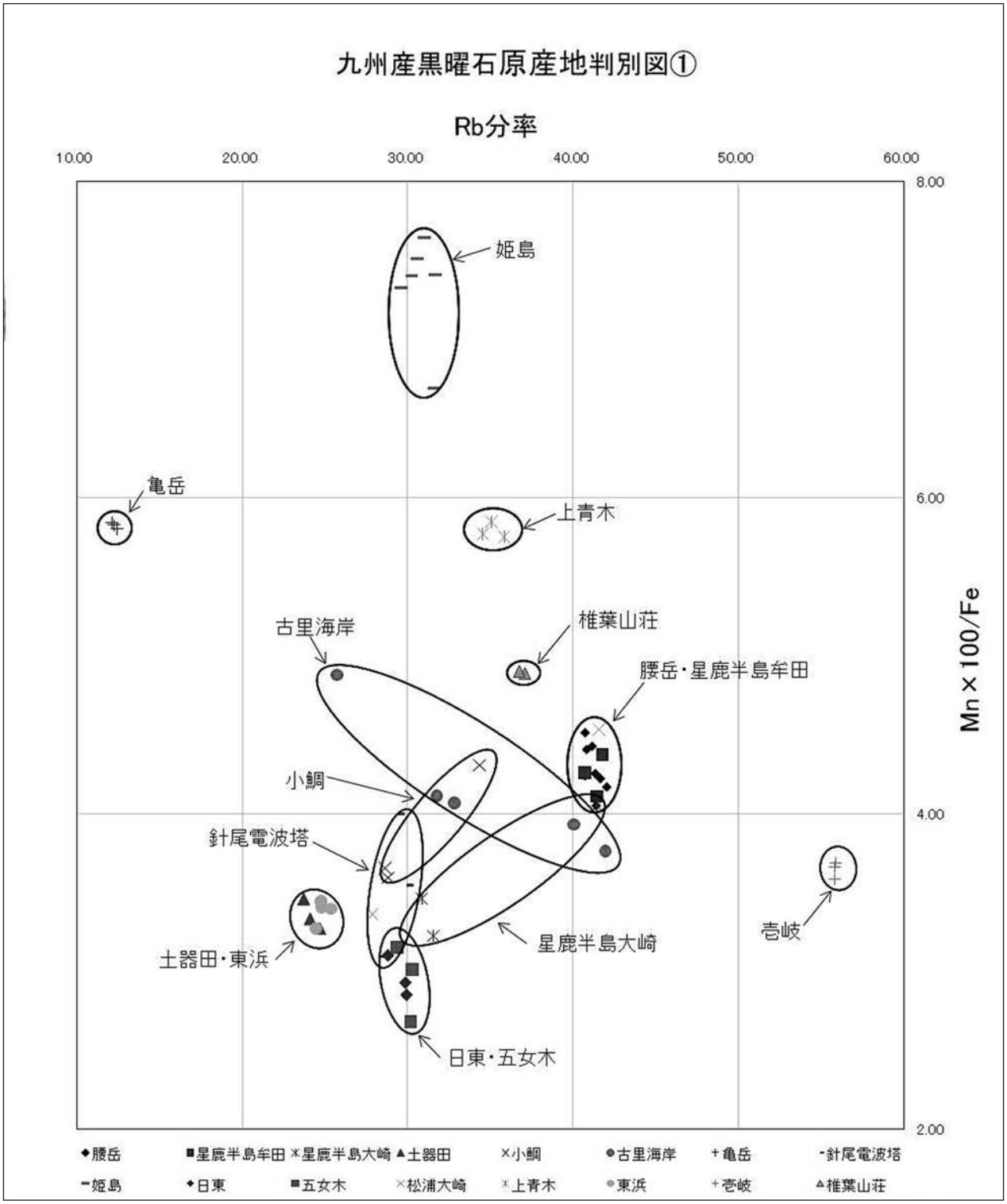


図３　九州圏内黒曜石原石の判別図①

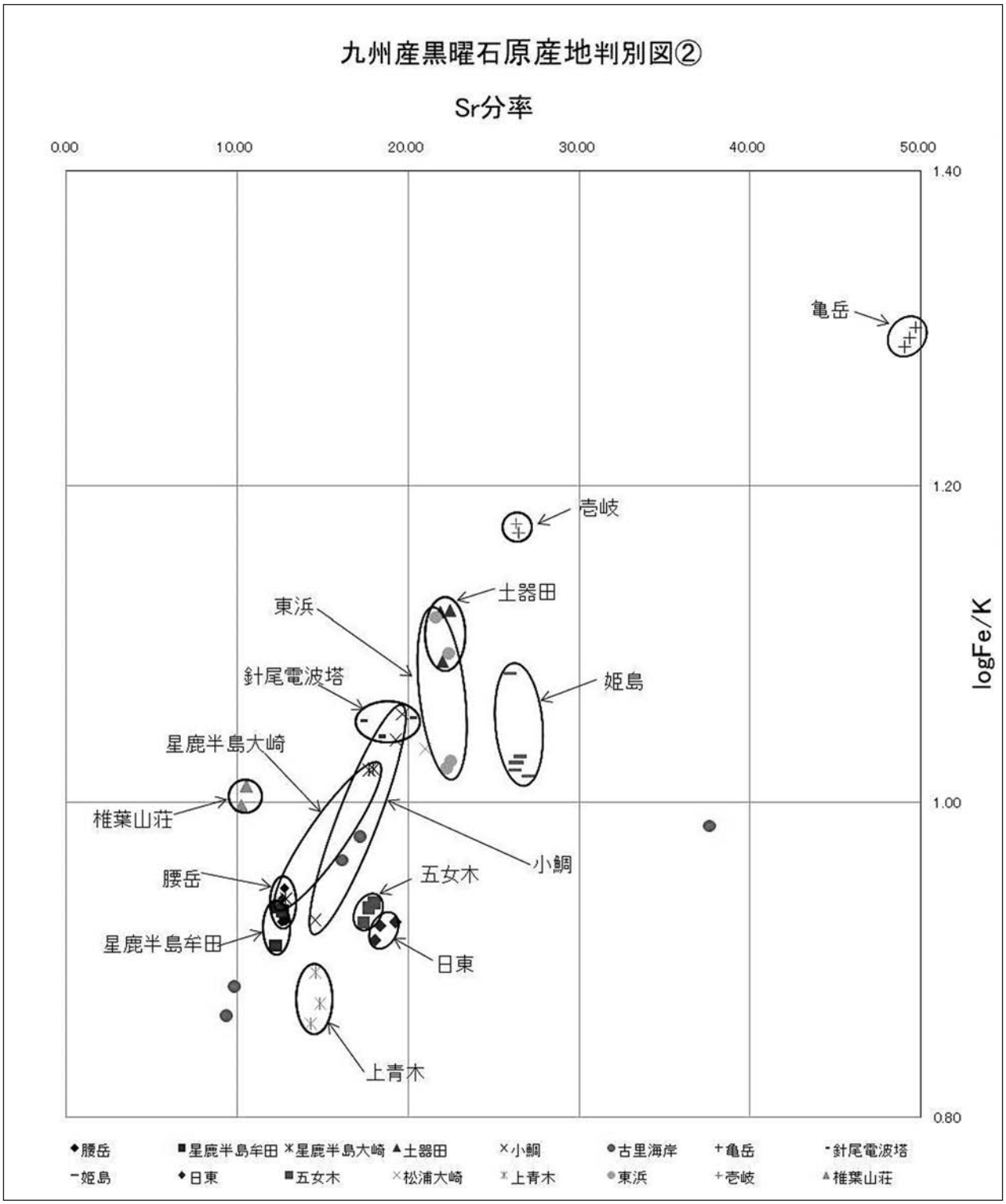


図４　九州圏内黒曜石原石の判別図②

VI. まとめ

今回、センターに導入されている蛍光Ｘ線分析装置を用いて黒曜石の原産地推定を試みたが、いくつかの原産地に関しては判別図法により産地推定を行える可能性が伺えた。しかし、原石分析点数が未熟なためデータのバラつきが多く、また九州圏内の黒曜石原産地原石を網羅できているともいえない。今後さらに基礎データを積み重ねることで黒曜石産地推定に有効な情報が得られると考える。

本報は平成 26 年 7 月に奈良教育大学で開催された第 31 回日本文化財科学会において発表した研究要旨を一部加筆して再録したものである（片多ほか 2014）。

黒曜石原産地のデータを分析するにあたり、雲仙市教育委員会の辻田直人氏、福岡市埋蔵文化財センターの田上勇一郎氏には、貴重な黒曜石原石を提供いただいた。また辻田氏には分析作業においても多くの助けをいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

（参考・引用文献）

望月明彦 2004「用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定」『用田大河内遺跡』かながわ考古学財団調査報告第 167 冊

池谷信之 2009『黒曜石考古学―産地推定が明らかにする社会構造とその変化―』神泉社

明治大学古文化財研究所 2011『蛍光 X 線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定―基礎データ集＜２＞―』

竹原弘展 2013「判別図法によるサヌカイトの産地推定について」日本文化財科学会第 30 回要旨集

片多雅樹、今西亮太 2014「判別図法を用いた黒曜石の産地推定」日本文化財科学会第 31 回要旨集

長崎県埋蔵文化財センター
研究紀要　第５号
2015 年３月

松浦党城郭雑感～塩津留氏の城跡～

林　　隆広

1．はじめに

「松浦党城郭雑感」という主題で北部九州における松浦党に関連する城郭を考察しているが、今回は塩津留氏の城跡として、壱岐市の郡城跡、鶴翔城跡を対象とする【註１】。

2．塩津留氏について

塩津留氏は『海東諸国記』（1471 年著）の「一岐島」に「…志佐･佐志･呼子･鴨打･塩津留分治す…」と記された、中世の壱岐を支配した、いわゆる「松浦五氏」の一つである。さらに『海東諸国記』の「加愁郷（可須のことで、現在の壱岐市勝本町一帯のこと）」には「古仇音夫（国分）郷　源経之を主る。己丑年、図書を受け、歳遣一、二舡を約す。書に、上松浦塩津留助次郎源経と称す。源重實　丁丑年､歳遣一舡を約す。書に､上松浦塩津留松林院主源重實と称す。宗殊　己卯年､遣使来朝す。書に、一岐州上松浦塩津留観音寺宗殊と称す。歳遣一舡を約す。」とある。正式な図書受領人かどうかの違いはあるものの、源経や松林院主源重實、観音寺宗殊といった塩津留氏一族が壱岐の国分を中心に所在し、朝鮮との貿易に従事していたことがうかがえる。この塩津留氏の本拠地は呼子地方（現在の唐津市鎮西町）で、現在も「塩鶴」の字名が残る。塩津留氏の出自、また呼子地方から壱岐へ進出した経緯や時期については記録がなく不詳である。1329（元徳元）年の『有浦文書』に、「佐志鹽津留四【長】郎入道源光」が佐志勤と境論争して和与したことが記されているが、この「源光」が佐志氏を名乗っていることから、佐志氏の分脈である可能性がある。その後、塩津留氏の消息は文献上から確認できない。『朝鮮王朝実録（世宗十年)』(1428：正長元）に「日本源英」が知られるが、これが塩津留氏と考えられ、『実録（世宗二十六年)』の「鹽津留沙彌源英」と同一人物と思われる。これ以降、『実録』には「塩津留源聞」「観音寺實譽」「松林院重實」「塩津留源経」の名が見え、朝鮮王朝との通交も五十数回に及び、海上勢力としての活発な交易の様子がうかがえる。管見では 1469（応永３）年以降の『実録』の記述が分からないため、その後の塩津留氏の消息がつかめないが、壱岐島では 1472（文明４）年に波多下野守泰（岸岳城主）が壱岐を侵攻するという契機が訪れる。志佐壱岐守義の代官である真弓氏を中心とした松浦五氏は覩城に籠城したが敗れた。波多泰は亀丘城を改修して壱岐支配の拠点とし、同族の波多阿波守を代官として壱岐島の支配を開始している。そのため、塩津留氏は本拠地の呼子地方に戻ったか、あるいは国分地方の小領主として波多氏の支配下に収まったのであろう【註２】。ともかくも､15 世紀後半以降の塩津留氏の消息はよく分からないのが実情である。

3．塩津留氏の城跡について

(1) 郡城跡

芦辺町国分東触、標高 150 メートルの丘陵に位置し、後述する鶴翔城跡とは１キロメートル程度しか離れていない。ともに塩津留氏の城跡と考えられるため、この郡城跡が平時の居館として機能していたと推測される。曲輪は方形を呈し、南面には土塁が残る。曲輪の北西部が宅地造成に伴い削平

されているが、かつては四方に横堀が巡っていたと推測される。また曲輪南東部は馬踏が幅広く、櫓台のようである。松浦党の城郭としては極めて珍しい方形プランの構造である。

『壱岐名勝圖誌(以下、『圖誌』)』には「周囲七町四拾四間半、隍三重あり。本丸乾に門跡あり。」とあり、『壱岐郡鑑』や『壱岐續風土記』を引用して、塩津留氏の居城であると推測し、当城の北に「少林防【坊カ】といへる民居あり。亦其北に観音寺といへる梵刹あり」として、『海東諸国記』における「一岐州上松浦塩津留観音寺宗殊」「松林院實譽」「松林院重實」との関連を示唆している。現在も郡城跡の敷地は当地の北約五百メートルに位置する観音寺が所有しており、観音寺と塩津留氏、また郡城との関係の深さがうかがえる。

(2) 鶴翔城跡

芦辺町中野郷西触の飛石山と呼ばれる標高 98 メートルの山頂に位置する。前述の郡城跡とは近接し、立地的に塩津留氏が有事における詰め城として構築したものと推測される。北西側に延びる尾根を遮断するように、一部に石積みを用いた遮断壁（基本的に垂直な土塁、一部に石積みを使用）が馬蹄形に巡る。その内側はやや凹みを見せるため、武者走りのような構造であろうかと推測される。最頂部は緩斜面の残る自然地形で、平坦化されていない。城域の南側は自然地形の傾斜で、露頭岩が多く見える。現在は遮断壁の一部を開削して通路が造られているが、往時の土入り口は判然としない。

『圖誌』に「本丸の石垣の周囲弐町半、丑寅の方に門跡あり。(中略) 此城の事、郡鑑にも見えす。若塩津留氏の族の居せし所にや云々。【今地理を考えるに、居住せし所ともみえす。城取せしものと覚ゆ。石垣の後なと残れハ也】」とある。

4．塩津留氏関連城郭の検討

郡城跡は方形プランの城郭で、長崎県内では開城跡（諫早市飯盛町）しか管見では知らない。地形的な制約から方形プランに到ったとも思えず、やはり意図的なプランの選択と解釈してよいと思われ、このことは松浦党の城郭としては極めて異質である。あるいは近世以降の庄屋敷跡などの可能性もあるのではないかと思われる。

鶴翔城跡は城域内の平坦化がまったく行われていない。また城域の北西側に延びる尾根筋の遮断も空堀や土塁ではなく、垂直な段差を設ける構造である。これは郡城跡と同様に、他の松浦党の城郭と異なるものである。そのため神籠石のような宗教的空間として機能した痕跡ではないかと疑う向きもある。

文献上は松浦党と評価できる塩津留氏であるが、城郭跡からは極めて特異な性格がうかがえる。今後、発掘調査など新たな知見を得る機会があることを期待したい。

【 註 】

1．使用する縄張り図は執筆者が測量および製図したものである。

2．志佐氏の代官であった真弓氏は、壱岐島が波多氏の支配下に入った 15 世紀後半以降も『実録』に通交者として記されている。このことは波多氏がそれまでの壱岐在地勢力を完全に排除せずに壱岐島の領有支配を行ったことを意味し、その他の松浦五氏についての消息を考える上での参考となる。

【 参考文献 】※五十音順、なお行政機関が発行した編纂史や調査報告書等は発行機関で明示している

後藤正足 1978『壱岐郷土史』歴史図書社

瀬野精一郎 2004『松浦党関係史料集』（第三）続群書類従完成会
瀬野精一郎 2009『松浦党関係史料集』（第四）八木書店
外山幹夫 1980『日本城郭体系　第 17 巻　佐賀・長崎』新人物往来社
中村安孝 1975『壱岐名勝図誌』（上）名著出版
長崎県教育委員会 2011『長崎県中近世城館跡分布調査報告書Ⅱ - 詳細編 -』長崎県文化財調査報告書第 207 集

表 1　塩津留氏　関係史料一覧

元号	西暦	月日	名	内容	出典
元徳元	1329		佐志鹽津留四(長)郎入道源光	佐志勤と境相論して和与する	有浦文書
正長元	1428	七月庚申(十日)	日本源英(鹽津留)	人を遣わせ土物を献じ正布三十匹を賜う	『実録』　世宗10
永享二	1430	正月乙丑(二十四日)	肥前州源英(鹽津留)	人を遣わせ土物を献じ正布四十四匹を賜う	『実録』　世宗12
嘉吉四	1444	四月壬午(三日)	鹽津【留】源聞	慶尚道観察使曰く倭賊を捕獲す	『実録』　世宗26
嘉吉四	1444	四月己酉(三十日)	一岐州上松浦鹽津留沙門松林院【實譽か】	禮曹に復書す	『実録』　世宗26
嘉吉四	1444	四月己酉(三十日)	鹽津留沙彌源英	實譽は源英の孫	『実録』　世宗26
嘉吉四	1444	四月己酉(三十日)	一岐州上松浦鹽津留伊勢守源聞	禮曹に復書す　源英の跡を継ぐ	『実録』　世宗26
文安二	1445	二月庚午(二十六日)	一岐島鹽津【留】實譽	時羅沙文を遣わし土物を献ず	『実録』　世宗27
文安二	1445	三月甲申(十一日)	鹽津【留】源聞	倭賊を捕送す	『実録』　世宗27
文安三	1446	四月丁巳(二十日)	一岐州鹽津留聞	下賜せられる	『実録』　世宗28
文安六	1449	五月丙申(十七日)	一岐州鹽津留聞	人を遣わせ猿を献ず	『実録』　世宗31
寶徳二	1450	六月丙子(四日)	【鹽津】留源聞	使二人送り土宜を献ず	『実録』　文宗元
寶徳二	1450	六月丙子(四日)	【鹽津留松林院】實譽	使二人送り土宜を献ず	『実録』　文宗元
寶徳二	1450	六月壬寅(三十日)	一岐州松林院實譽	誠心歸順す	『実録』　文宗元
寶徳二	1450	七月己酉(七日)	一岐州【鹽津】留源聞	正倫等を遣わす	『実録』　文宗元
寶徳四	1452	七月甲午(三日)	日本国上松浦鹽津留源聞	使を遣わし来たりて土物を献ず	『実録』　瑞宗元
享徳二	1453	五月丁巳(一日)	上松浦一岐鹽津【留】観音寺宗殊	景禧殿に進香す	『実録』　瑞宗元
享徳二	1453	五月己卯(二十三日)	上松浦一岐鹽津【留】源聞	遣人来たりて土物を献ず	『実録』　瑞宗元
永享三	1454	四月戊子(七日)	日本國一岐州上松浦鹽津留松林院主重實	遣人来たりて土物を献ず	『実録』　瑞宗2
永享四･康生元	1455	正月丁卯(二十一日)	一岐州上松浦松林院住持重實	遣人来たりて土物を献ず	『実録』　世宗元
永享四･康生元	1455	二月甲申(八日)	上松浦【鹽津】留伊勢守源聞	遣人来たりて土物を献ず	『実録』　世宗元
永享四･康生元	1455	二月辛卯(十五日)	一岐州上松浦鹽津留伊勢守源聞	遣人来たりて土物を献ず	『実録』　世宗元
永享四･康生元	1455	二月丙申(二十日)	一岐州源聞【鹽津留】	三甫羅洒毛の送還を乞う	『実録』　世宗元
永享四･康生元	1455	五月丙辰(十二日)	上松浦鹽津留伊勢守源聞	遣使来たりて土物を献ず	『実録』　世宗元
永享四･康生元	1455	五月丙寅(二十二日)	一岐州源聞【鹽津留】	使人が三甫羅洒毛を富山浦倭館の前路で切る	『実録』　世宗元
永享四･康生元	1455	六月庚辰(六日)	上松浦松林院主重實	遣使来たりて土物を献ず	『実録』　世宗元
永享四･康生元	1455	十月辛未(二十九日)	伊勢守源聞【鹽津留】	遣使来たりて土物を献ず	『実録』　世宗元
永享四･康生元	1455	十一月戊戌(二十七日)	伊勢守源聞【鹽津留】	遣使来たりて土物を献ず	『実録』　世宗元
康生二	1456	三月甲戌(五日)	鹽津留伊勢守源聞	遣使来たりて土物を献ず	『実録』　世祖2
康生二	1456	三月乙亥(六日)	上松浦【鹽津留】伊勢守源聞	遣使来たりて土物を献ず	『実録』　世祖2
康生二	1456	三月癸巳(二十四日)	鹽津留伊勢守源聞	遣使来たりて土物を献ず	『実録』　世祖2
康生二	1456	五月乙亥(七日)	上松浦観音寺看主宗殊	遣使来たりて土物を献ず	『実録』　世祖2
康生三･長禄元	1457	五月庚寅(二十八日)	一岐州上松浦重實	遣使来たりて土物を献ず	『実録』　世祖3
長禄二	1458	七月辛亥(二十六日)	上松浦鹽津留伊勢守源聞	遣使来たりて土物を献ず	『実録』　世祖4
長禄四･寛正元	1460	九月丁丑(四日)	一岐州源聞【鹽津留】	遣使来たりて土物を献ず	『実録』　世祖6
寛正三	1462	五月癸卯(九日)	上松浦鹽津留松林院源重實	遣人来たりて土物を献ず	『実録』　世祖8
寛正四	1463	二月庚申(一日)	上松浦一岐州鹽津留伊勢守源聞	遣人来たりて土物を献ず	『実録』　世祖9
寛正五	1464	七月甲戌(二十三日)	一岐州上松浦鹽津留松林院源重實	遣人来たりて土物を献ず	『実録』　世祖10
寛正五	1464	九月乙卯(五日)	一岐州上松浦鹽津留観音寺看主宗殊	遣人来たりて土物を献ず	『実録』　世祖10
寛正六	1465	五月辛亥(五日)	一岐州上松浦鹽津留観音寺看主宗殊	遣人来たりて土物を献ず	『実録』　世祖11
寛正六	1465	七月己酉(四日)	上松浦一岐州鹽津留松林院主源重實	遣人来たりて土物を献ず	『実録』　世祖11
寛正六	1465	八月癸未(八日)	上松浦一岐州鹽津留伊勢守源聞	遣人来たりて土物を献ず	『実録』　世祖11
寛正七･文正元	1466	三月丙辰(十五日)	一岐州上松浦鹽津留伊勢守源聞	和知羅沙也文を遣わし来たりて土物を献ず	『実録』　世祖12
寛正七･文正元	1466	六月戊午(十九日)	一岐州鹽津【留】源重實	遣人来たりて土物を献ず	『実録』　世祖12
寛正七･文正元	1466	七月庚午(一日)	上松浦一岐州鹽津留松林院源重實	遣人来たりて土物を献ず	『実録』　世祖12
寛正七･文正元	1466	七月丙申(二十七日)	一岐州上松浦鹽津留観音寺宗殊	遣人来たりて土物を献ず	『実録』　世祖12
寛正七･文正元	1466	八月庚子(一日)	一岐州上松浦鹽津留観音寺宗殊	遣人来たりて土物を献ず	『実録』　世祖12
文正二･応仁元	1467	三月丁丑(十二日)	一岐州鹽津留伊勢守源聞	遣人来たりて土物を献ず	『実録』　世祖12
応仁三･文明元	1469	六月甲寅(二日)	上松浦鹽津【留】源經	遣使来たりて土物を献ず	『実録』　叡宗元

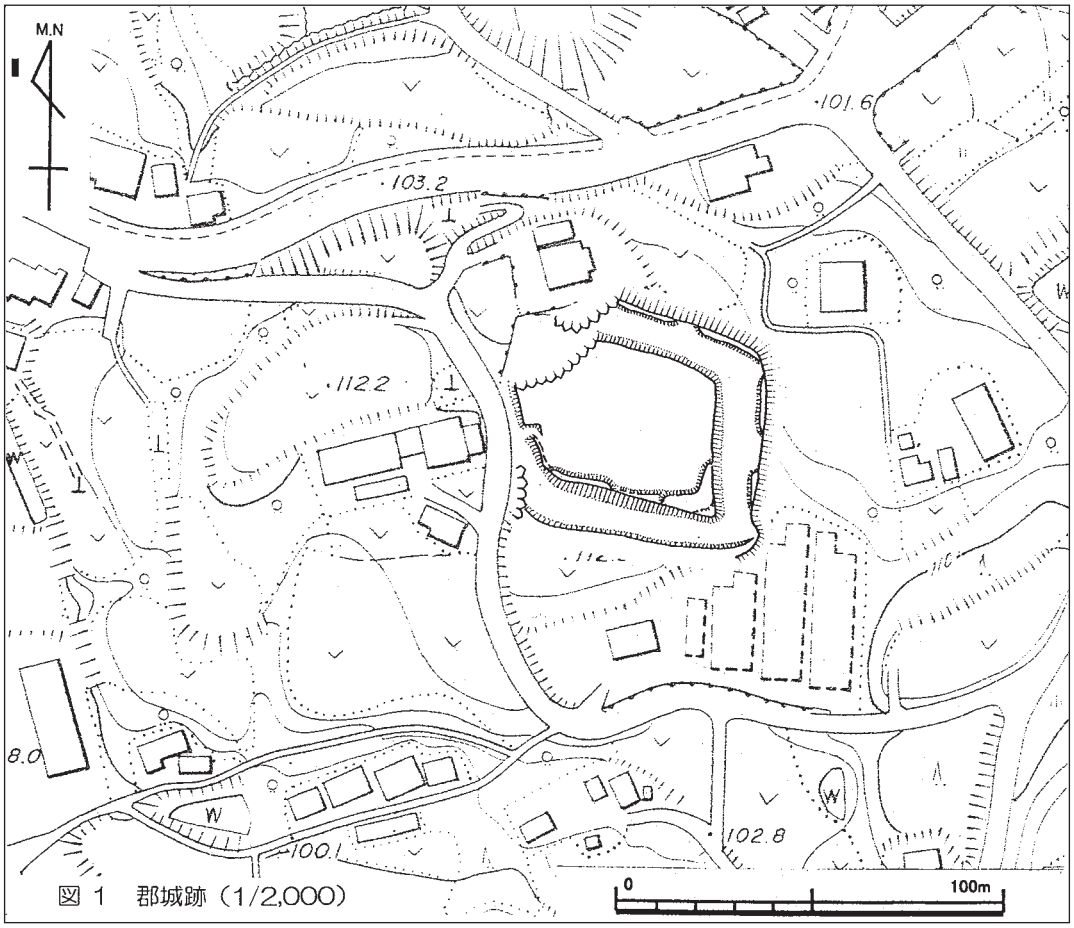


図１　郡城跡（1/2,000）

図１　郡城跡（1/2,000）

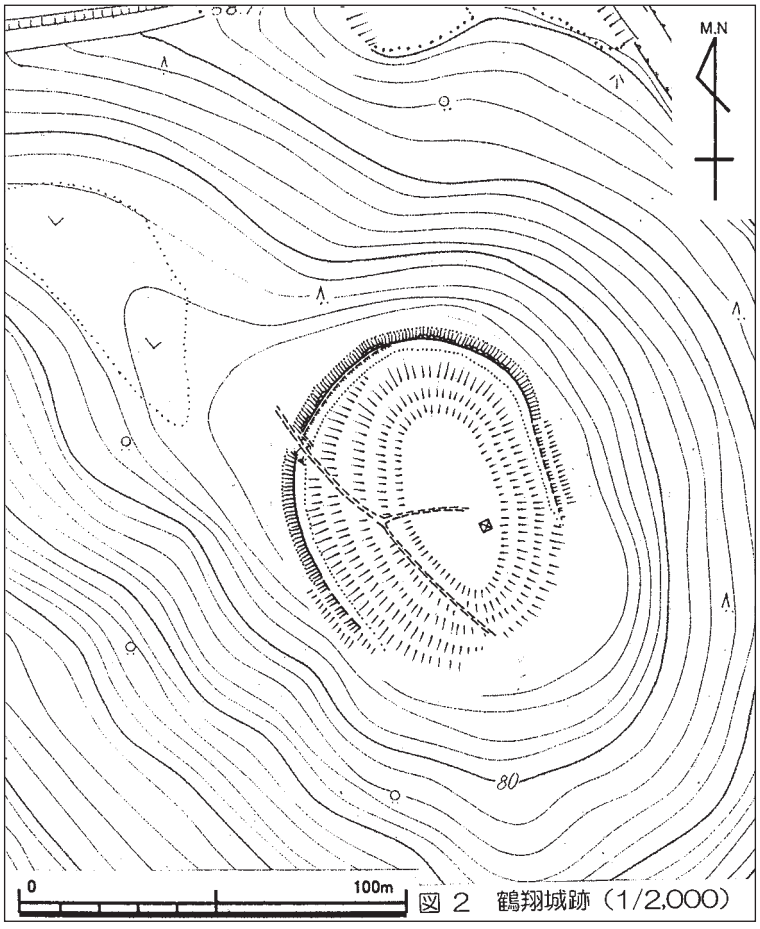


図２　鶴翔城跡（1/2,000）

図２　鶴翔城跡（1/2,000）

長崎県埋蔵文化財センター
研究紀要　第５号
2015 年３月

諫早市飯盛町所在の城跡について
～東城跡・平古場城跡・岡城跡・囲城跡の検討～

林　　隆広

１．諫早市飯盛町史の概要

かつては北高来郡飯盛町であったが、2005（平成 17）年に諫早市と合併し、今日に至っている。町内には縄文時代の遺跡である下ノ釜貝塚や下屯山遺跡、上原遺跡や築崎遺跡が江ノ浦川下流域に点在し、西馬場遺跡、平古場遺跡など江ノ浦川中上流域にも広がりを見せている。古代、律令体制下では高来郡に属し、『肥前国風土記』における土歯郷の地に比定されている。町域西部の田結名には二ノ坪や六ノ坪といった地名が残ることから、かつては条里が営まれたと推測されている。

中世における在地土豪として、船津氏の名が 1271（文永８）年の『宗像神社文書』関東裁許状案に見える。これによれば、船津次郎家重が宗像氏業、長野氏郷と伊佐早荘長野村内浦福地をめぐって相論し敗訴している。この相論で船津家重は、その祖父である船津高宗が 1179（治承３）年に当地の本領主であった江助宗から譲り受けたと主張している。この主張が正しければ、船津氏は平安末期から江ノ浦川河口部の船津名を中心に知行していたと推測できる。南北朝期以降となると、1340（暦応 3）年の『深堀文書』鎮西探題一色道猷書下に荏浦および江浦氏の名が見える。これによれば、深堀（高浜）政綱が 1338（建武５）年に受けた恩賞である「肥前国伊佐早庄戸石村内矢上空閑民部三郎入道妻女跡田地捌（八）町地頭職」が執行されないために、一色道猷が河原源三郎入道と荏浦六郎次郎入道に再度執行を命じたものである。同様に深堀（高浜）政綱の恩賞である「同国（肥前国）温江大野田崎村内孫次郎入道同四郎同小次郎跡田地玖（九）町地頭職」のなかの孫次郎入道跡の田地ついても、湯江弥次郎が証状を出帯しないため伊佐早三郎とともに江浦六郎が沙汰付を命じられている。荏浦六郎入道と江浦六郎は同一人物と考えられるが、深堀氏や伊佐早氏と同様に肥前西部の在地土豪として存在したことが分かる。

また 1370（正平 20）年２月９日『深堀文書』に、「ひぜんこくいさはやしようかせしまのうきとくぶんおむねなかとりがぶんおたかはまとのに…（中略）…えいだいにうりそうろう。…（中略）…おおえむねな□　うりけんのじよう　ゑのうらのひこたろう（肥前国伊佐早庄風島の浮得分、むねなか取が分を高浜殿に…永代に売り候。大江むねな□＜宗長カ＞　売券の状　江浦彦太郎）」とある。これは大江むねなかなる人物が伊佐早庄風島の浮得分を高浜殿（広綱カ）に年季を定めた本物返しの買戻し特約つきで売却したというものである。この大江（宗長カ）氏と江浦彦太郎は同一人物であり〔平 2014〕、また風島とは『海東諸国記』「肥前州」にある「源信吉　戊子年、遣使して来り、観音現像を賀す。書に、肥前州風島津太守源信吉と称す」の風島にあたるという見解〔竹内 1967〕があり、これらが正しければ、1468（応仁２）年に源姓を名乗って朝鮮王朝と通交する勢力が飯盛町江ノ浦村付近に存在したことになる。

室町時代以降となると、伊佐早庄は西郷氏が支配するところとなり、飯盛町域もその対象となるが、西郷氏による当町域の支配形態は同時代史料がなく明らかでない。また西郷氏は有馬氏の有力家臣として活動した時期もある〔外山 2011〕。そのためか飯盛町里名の西明寺に伝わる『西明寺縁

起』には当院の開祖として肥前島原城主有馬修理佐清晴の家老「町田源兵衛尉師秀」の名を記しているが、これは信憑性に欠ける史料といわざるをえない【註1】。1577（天正 5）年に竜造寺隆信が行った大村【註2】および伊佐早方面への出兵で、西郷一門 26 名が連署で竜造寺隆信へ神文を差し出しているが、このうち 1577（天正 5）年 10 月 14 日『竜造寺文書』に「東左衛門大夫純盛」と見え、これが田結川上流に位置する東城の城主とされている〔満井・土井 1974〕。また元禄期に記された『西郷記』および『西郷責実録』にある「東伯耆（守）」も同一勢力（または同一人物）であろうと思われる。ともかくも室町期以降から戦国期の飯盛町域における在地勢力の動向は不詳であるといわざるをえない。室町時代以降に伊佐早を支配した西郷氏は、豊臣秀吉による九州仕置きで改易され、代わりに 1587（天正 15）年に竜造寺家晴が新しく領主となる。その後、伊佐早竜造寺氏は二代目直孝のときに鍋島氏（佐賀 35 万 7 千石）の国家老となり、知行地および姓を伊佐早から諫早に改めている。

近世に入り、飯盛町域は諫早家知行地として田結村と江ノ浦村に分けられ、さらに江ノ浦村は深堀私領の「八町分」と、1750（寛延 3）年の諫早百姓騒動の際に上地（蔵入地に編入されること）された「六町分」、その他の「三町分」に分けられた。幕藩体制の進展とともに藩財政が逼迫し、佐賀藩でも上記のように家臣団の知行地を借り上げて蔵入地としたが、特に諫早家など他の竜造寺系家臣には厳しい処置がとられたため知行高は当初の 5 万 6 千石から 2 万 6 千石にまで減少したといわれる。このような情勢下で、諫早家六代領主の諫早茂元のときに月の港（江ノ浦）の干拓が行われる。この月の港の干拓事業は元禄年間（1688 ～ 1704）に行われたが、当時の諫早家はすでに諫早湾沿岸で多くの干拓事業を展開しており、領主直営での干拓が財政的に難しい状況にあった。そのため士族開による干拓を採用し、当時干拓事業の技術が高いとされた八代（肥後国）から松本四郎左衛門を招聘した。松本四郎左衛門を中心に、八代から移住した開拓百姓達が居住した地区は干拓によって新田が開発されたことから開名と呼ばれ、彼らは開百姓と呼ばれた。

2．飯盛町所在の城郭

(1) 東城跡

標高 138 メートルの丘陵上に位置し、頂部の西側には八幡神社が鎮座する。その八幡神社の東側に自然地形を利用した楕円形の曲輪〔Ⅰ〕が構築される。曲輪〔Ⅰ〕はその北側に約 0.5 メートル高い空間が見られる。また南側は緩やかな傾斜が残る。曲輪〔Ⅰ〕の東側は稜線の曖昧な腰曲輪が四段ほど築かれ、一部に露頭の岩が転がっている。曲輪〔Ⅰ〕の西側、八幡神社との間には曲輪〔Ⅱ〕が見られるが、スロープ状の小口のみで堀切や土塁といった遮断施設は構築されていない。八幡神社が位置する頂部と曲輪〔Ⅱ〕の間の鞍部は堀切を設けて両空間を隔絶すべきであるが、自然地形の浅い凹みのままである。この八幡神社の鎮座する頂部も城構えに取り込まれていたと思われるが、現在は社殿と登山道の設置により大きく削平されており、往時の地形は不詳である。

縄張りの平面構造は、自然地形に即したプランであり、また曲輪間の出入口（小口）も単純で、遮断施設も特に設けていない。そのため、相対的に古相に属する城郭構造ではないかと想定している。

(2) 平古場城跡

標高 80 メートルの丘陵上に位置する。北西から南東に延びる丘陵頂部を堀切で遮断し、その南東

側に自然地形の影響を受けた不定形を呈する２つの曲輪〔Ⅰ〕および曲輪〔Ⅱ〕を設けている。堀切の東側は竪堀状に食い込む地形であるが、人為的な掘り込みであるか判断が難しい。曲輪〔Ⅰ〕は堀切側に土塁を設けて防御を固めている。また中央部分に自然地形の高まりを残して平坦化が徹底されておらず、曲輪〔Ⅱ〕とは浅い凹みで隔てられている。曲輪〔Ⅱ〕は平坦に削平されており、東城の主郭と思われるが、曲輪〔Ⅰ〕よりも標高は若干低い。曲輪〔Ⅰ〕および曲輪〔Ⅱ〕の周囲には帯曲輪が巡り、その南東側には土塁の痕跡が認められる。帯曲輪の西側に見られる出入口〔ａ〕は、堀切の西側から接続する導線と思われる。曲輪〔Ⅰ〕の西側に一段低い腰曲輪が見られるが、これはその導線を押さえる目的で設けられた可能性が高い。

堀切の北西側は自然地形を多く残し、積極的に曲輪とは評価できない。ただし曲輪〔Ⅲ〕は、その北西側を堀切状の急峻な傾斜に削っていることから、平坦化は不徹底ながらも曲輪としての機能を果たしていたのではないかと思われる。曲輪〔Ⅲ〕の西側には尾根筋を遮断する堀切が設けられ、その一部は竪堀化している。また曲輪〔Ⅲ〕の北側尾根筋は自然地形を残す空間が続き、その先には横堀状のスロープが東側から登ってくる。この横堀状のスロープ内は曲輪〔Ⅳ〕があり、この横堀状のスロープを押さえる位置関係となっている。またスロープはさらに東側へ延びており、竪堀状となる。

縄張りの平面構造は、自然地形の影響を受けたプランであり、また遮断施設は堀切が主体である。横堀状のスロープは、やはり導線としての機能が中心であると評価している。

(3) 岡城跡

北から南へ三つ叉状（三方向）に延びる三本の尾根の中央部分、標高約 50 メートルの丘陵上に選地し、二重の堀切で遮断している。なお北側の堀切は掘り込みも浅く、完全に繋がらないものの堀切を意図したものと判断している。曲輪〔Ⅰ〕は不定型な五角形を呈し、堀切に面する北面および北西面には馬踏の広いしっかりとした土塁を設けている。曲輪〔Ⅰ〕南側の四角い窪地は、何らかの施設（神社等）の痕跡と思われる。曲輪〔Ⅰ〕の東西は段々の削平面となり、いわゆる帯曲輪となっているが、東西でその様相は異なる。まず東側は比較的幅の広い帯曲輪〔Ⅱ〕を中心に数段の腰曲輪を構築しているが、それよりも標高が下がる江ノ浦川の浸食によって形成された急峻な斜面が天然の切岸となる。この帯曲輪〔Ⅱ〕に伴う遮断施設（土塁や堀）は確認できないが、西側斜面の急峻な地形では必要ないのかもしれない。一方、主郭の西側は距離間および高低差のある帯曲輪が二段構築されるが、標高の低い帯曲輪には短い竪堀と、帯曲輪の平坦面を分断するような駱駝の瘤状の隆起がいくつも確認される。管見では馬ケ岳城跡（福岡県行橋市）や日高城跡（佐賀県唐津市）などで見られる畝状空堀群の派生系（亜流）ともいえる構造で、これによって帯曲輪上での横移動は制約されている。また西側帯曲輪を繋ぐ一条の竪堀があるが、この竪堀の南西側には土塁を設け、北側尾根筋からの移動、すなわち城域を遮断する二条の堀切を越えてさらに主郭西側帯曲輪群への侵入を防ぐ構造となっている。曲輪〔Ⅰ〕南側の斜面に設けられる曲輪の西側は竪堀状の凹みが見られるが、遺構か崩落か判断が難しい。主郭東側の崩落表現も同様である。

曲輪〔Ⅰ〕を中心とする城域と尾根筋を隔絶する掘切より約 180 メートル北側の鞍部に土橋を伴う堀切が構築され、その東西部分は竪堀化している。また三つ叉状尾根筋の東部分には等高線に並行する横堀状の凹みが見られる。この横堀状の凹みは登山道かとも思われたが、その両端はいずれも自

然地形の急峻な傾斜に接続すると途切れるため、遮断施設と判断するのが妥当と思われる。しかしながら、この北側鞍部の堀切（東西は竪堀化）および三つ叉状尾根筋東側の横堀と、城域を遮断する二重の堀切の間に位置する空間は完全な自然地形であり、曲輪化されていない。

自然地形のまま広がる城域北側の広大な空間は、その様相が臨時性、危急性を示唆しており、堅固な防御施設を構築する曲輪〔Ⅰ〕周辺との差違とあわせて非常に興味深い現象といえる。

(4) 囲城跡

方形を呈する主郭の縁辺は高さ3メートル程の土塁で囲まれ、その規模は35メートル×30メートルを測る。曲輪の南西側に土塁が開口して小口となり、土橋が設けられている。主郭の周囲には横堀が巡るが、横堀の外縁を構成する土塁の西側は馬踏が広く曲輪化しており、また鉤状に折れて主郭南西側の横堀外縁の土塁と食い違いの構造となっている。そのため横堀は堀底道として主郭南西側の小口に到る導線としても機能したと考えられ、都合四折れする技巧的な構造である。主郭北東側は約90メートルの長い堀切が設けられ、主郭を取り囲む横堀と不明瞭に接続する。また、主郭北側に横堀が延び、結果として竪堀となっている。主郭の南東側、横堀を超えた一帯は三角形を呈する自然地形を残す空間であるが、状況的に曲輪として機能していた可能性が高いと思われる。

高い土塁を巡らし方形を呈する主郭の構造は、長崎県はもとより福岡県や佐賀県など北部九州でも類例の少ない形態である。

3．考察

これら飯盛町域に所在する城跡と、文献等で把握できる当該地域における在地勢力との関係性をどのように推測できるか検討する。まず、当該地域の在地勢力で最も早くに文献に登場するのは船津氏であるが、この船津氏の居城とされる船津城跡の比定地は江ノ浦川の河口部に所在する。『宗像神社文書』からは、この船津氏が陸上の食料生産にその生業の重きをおいたか、または知行したとされる船津名の立地から海上交通に重きをおいたか分からない。しかし月の港と呼ばれる江ノ浦川下流域が、13世紀段階ではまだ食料生産基盤として十分に発達していなかったと判断できそうであり、そのため船津氏は、月の港や江ノ浦川を塞ぐように浮かぶ前ノ島や向島といった天然の良港を拠点に海上交通を主たる生業として活動したと思われる。南北朝期以降に散見される江浦（荏浦、または「ゑのうら」）氏は、その居城を想定することが難しい。地名との関係から江ノ浦川流域に勢力をもったことは確かと思われるが、『深堀文書』の「かせしまのうきとくぶん」にあるように、船津氏同様に海上交通にその生業を求めたのではないかと思われる。そう考えれば船津氏と江浦氏の系譜的な繋がりは否定できないと思われる。

次に城郭遺構を残す城跡4か所の構造を観察すると、明らかな違いが認められる。まず東城跡は急峻な自然地形を利用した要害であるが、頂部の曲輪群以外に積極的な防御施設を見いだせない古相の特徴を示している。『竜造寺家文書』や『西郷記』にある16世紀後半における東氏の居城とするには、その城郭遺構の在り方からは違和感がある。

平古場城跡は曲輪群以外に堀切および横堀化した導線が見られ、東城跡よりも相対的に新しい印象を受けるが、この平古場城跡と在地勢力との関係は文献から見出せない。ただ自然地形に影響された

楕円形の曲輪周囲に帯曲輪が廻る構造は他地域の西郷氏系城郭の特徴【註 3】と共通しており、文献に残されていない西郷氏系の在地勢力によって築城された可能性を指摘しておきたい。

岡城跡は城域および構築された城郭遺構が当該地域では突出した規模であり、特に竪堀（一部は畝状空堀群化）の存在は 16 世紀後半における構築を想定させる。この頃の在地勢力として文献上では前述の東氏の存在が確認されるが、岡城跡と東氏を結び付けるのはやや抵抗がある。『西郷記』に「一、其節不罷出者にハ討手被差越、村々にて殺害被仰付たる由。右之内田結村岩屋と申者鬼神の様成者にて手を入為討由。」とあり、これは 1587（天正 15）年 7 月の竜造寺家晴による西郷氏追討の後、西郷氏の残党が家晴の不在を狙って蜂起した事件の後日談であるが、旧西郷氏勢力の竜造寺氏に対する姿勢がうかがえる内容である。また岩屋が田結村の者である点も注目される。なぜなら東氏の居城である東城跡は、飯盛町域の西側である田結川方面であり、町域東側の江ノ浦川方面ではないからである。『西郷記』は元禄期の編纂資料であり、その使用には十分な配慮が必要であるが、飯盛町域以外の地域でも同様の旧西郷氏残党討伐が行われており、進駐軍であった竜造寺氏に対する旧西郷氏勢力の抵抗が大きかったことを物語っている。そのなかでもあえて「田結村岩屋」と実名をあげて記している点が他地域と異なり、飯盛地域が新しい支配者である竜造寺氏にとって特に記憶に残る激しい抵抗を示したのではないかと疑える。このような文脈で考えると、岡城跡は旧西郷氏勢力の色濃く残る飯盛地域を押さえるために進駐した竜造寺氏が新たに築いた城郭、または在地勢力が築いた既存の城郭を竜造寺氏が改修したものではないかと推測されるのである。特に北側の堀切（東西部分は竪堀化）と尾根筋東部分の横堀状の凹みの間に広がる自然地形の空間は、曲輪〔Ⅰ〕を中心とする二重堀切以南の城域に収容できなかった軍勢の、一時的な陣城として利用されたのではないかと考えられるのである。

最後に囲城跡であるが、この城跡の構造の特異さから、その築城契機を推測することが難しい。そもそも、これほど方形を意図したプランの城跡は長崎県内に存在しない。近世の干拓が行われる以前は、月の港に突出する岬状の地形を呈し、また囲城跡の南側には馬場という地名が残ることなどから、文献に残らない在地勢力の存在が想起されるが、それでもどのような経緯で武家権力の伝統的規範である方形プランを採用する勢力が飯盛町域に存在したのか疑問は残る。あるいは囲城跡の所在する地域が開名という、元禄期に月の港干拓を主導した松本四郎左衛門以下、八代から移住してきた開百姓の居住した場所であり、干拓事業の成果で生まれた新しい耕作地（1750 年頃までの出来地）の中心に位置する点は検討の余地があるかもしれない。松本家配下の開百姓は八代からの移住者であったため結束が固く、代々婚家を同じ開百姓のうちに求め、他地区との通婚を嫌ったらしい。それは開百姓としての結束を守ると同時に財産保全の意味合いもあったというが、いわば飯盛町域内で閉鎖的な血縁および地縁関係を維持した集団だったといえる。そのような集団が、囲城跡のような施設を作り、そこに貴重な収穫物等を貯蔵したのではないかと想像できないこともない。また、方形プランはもともと武家社会の伝統的な規範を表す形状でもある。この月の港の干拓事業は八代からの移住者で行われ、かつ諫早家の財政問題により士族開による事業が採用された結果、何らかのかたちで正当な領主権力による干拓事業であることを旧西郷氏勢力の影響の強い飯盛町域に主張する必要性があったのではないかだろうか。そのような仮定から導き出されるのは、囲城跡が月の港干拓を担った開百姓等による何らかの（例えば庄屋敷跡）施設ではなかったかという想像である。

今回は飯盛町域に所在する東城跡、平古場城跡、岡城跡、囲城跡の都合４か所の縄張り構造を中心に検討を行ったが、推測の域を出ない内容であった感は否めない。如何せん同時代史料の乏しい地域であり、文献等での検証が困難ではあるが、そのような情勢下で、縄張り構造を下地にどのような地域史の復元が可能か検討する例としては有意義ではないかと思われる。個人的には、月の港と称されたかつての江ノ浦周辺に、かくも個性的な城郭遺跡が展開している現象に強い興味を抱いている。当初は『竜造寺文書』や『西郷記』に登場する東氏の居城が、時代とともに移った（いわゆる時期差という考えで、同一勢力による築城技術の変遷が縄張り構造の変化に反映された結果）という推測をもとに検討を始めたが、岡城跡の竪堀群や囲城跡の極めて規則的な方形プランからは同一勢力による築城技術の変遷とは解釈し難い。そこで中世末の竜造寺氏による伊佐早進駐や、近世の月の港干拓にともなう構築を契機として提示してみた。いずれも想像の域をでないものではあるが、今後、さらに西郷氏や有馬氏といった肥前国西部の在地勢力における城郭遺構を調査するなかで、さらに検討を深めていきたいと考えている。

なお、本論の執筆に当たっては、諫早市文化振興課の野澤哲郎氏に御協力および御配慮を賜った。記して感謝する次第である。

【 註 】

1）『西明寺縁起』に開祖とある「町田源左兵衛尉師秀」が後土御門帝（1442 ～ 1500）の頃の人物であることから、「島原城主有馬修理佐清晴」は日野江城主有馬修理大夫晴純（1483 ～ 1566）のことと思われる。また町田源左兵衛尉師秀を継いだ子の町田左衛門尉正氏は父と同様に有馬氏に仕えて竜造寺隆信に対し敢闘したため、逆に竜造寺隆信より内応の誘いを受けたとしている。これは時期的に有馬晴純の嫡子で家督を継いだ有馬義貞の頃と思われるが、有馬氏が江戸期に編纂した家系譜である『藤原有馬世譜』には、有馬義貞の「老臣」として安徳、山田、堀、鬼塚、安富越中入道得円をあげ、また『国乗遺聞』には同じく有馬義貞の「国老」として谷川・久能・本田・堀・土黒をあげているが、いずれにしても町田の名は見られない。なお、同時代史料であるルイス＝フロイスの『日本史』には、有馬氏の有力家臣として安富徳円、土黒エイキュウをあげているが、やはり町田の名は見受けられない。

2）1577（天正 5）年の竜造寺氏による大村氏攻撃は菅牟田合戦とも呼ばれ、両陣営に多数の損害を出している。

3）西郷氏の居城である高城跡（諫早市高城町）や大村氏領との境目に位置する真崎城跡（諫早市真崎町）や平松城跡（諫早市本明町）など、西郷氏系の城郭は自然地形に即した平面形を呈する曲輪の周辺に帯曲輪を備える構造（結果、帯曲輪によって取り囲まれる曲輪の切岸が急峻になる）になっていることが多い。

【 参考文献 】

※五十音順に表記（ただし行政機関発行は発行機関名で表記）

平　幸治　2014 『肥前国　深堀の歴史　新装版』 長崎新聞社

竹内　理三　1987 『角川日本地名大辞典　42 長崎県』 角川書店

外山　幹夫　1980 『日本城郭体系』17 長崎・佐賀　新人物往来社

外山　幹夫　1997 『肥前　有馬一族』 新人物往来社

外山　幹夫　2011 『中世長崎の基礎的研究』 思文閣出版

満井　録郎・土井進一郎　1974 『新長崎年表（上）』 長崎文献社

ルイス・フロイス『日本史』 ※翻訳　松田毅一・川崎桃太（翻訳）2000『完訳フロイス日本史』9 ～ 12　中公文庫

飯盛町郷土誌編纂委員会　2004 『飯盛町郷土誌』 飯盛町

諫早市史編纂室　1980 『諫早市史』第２巻　諫早市役所

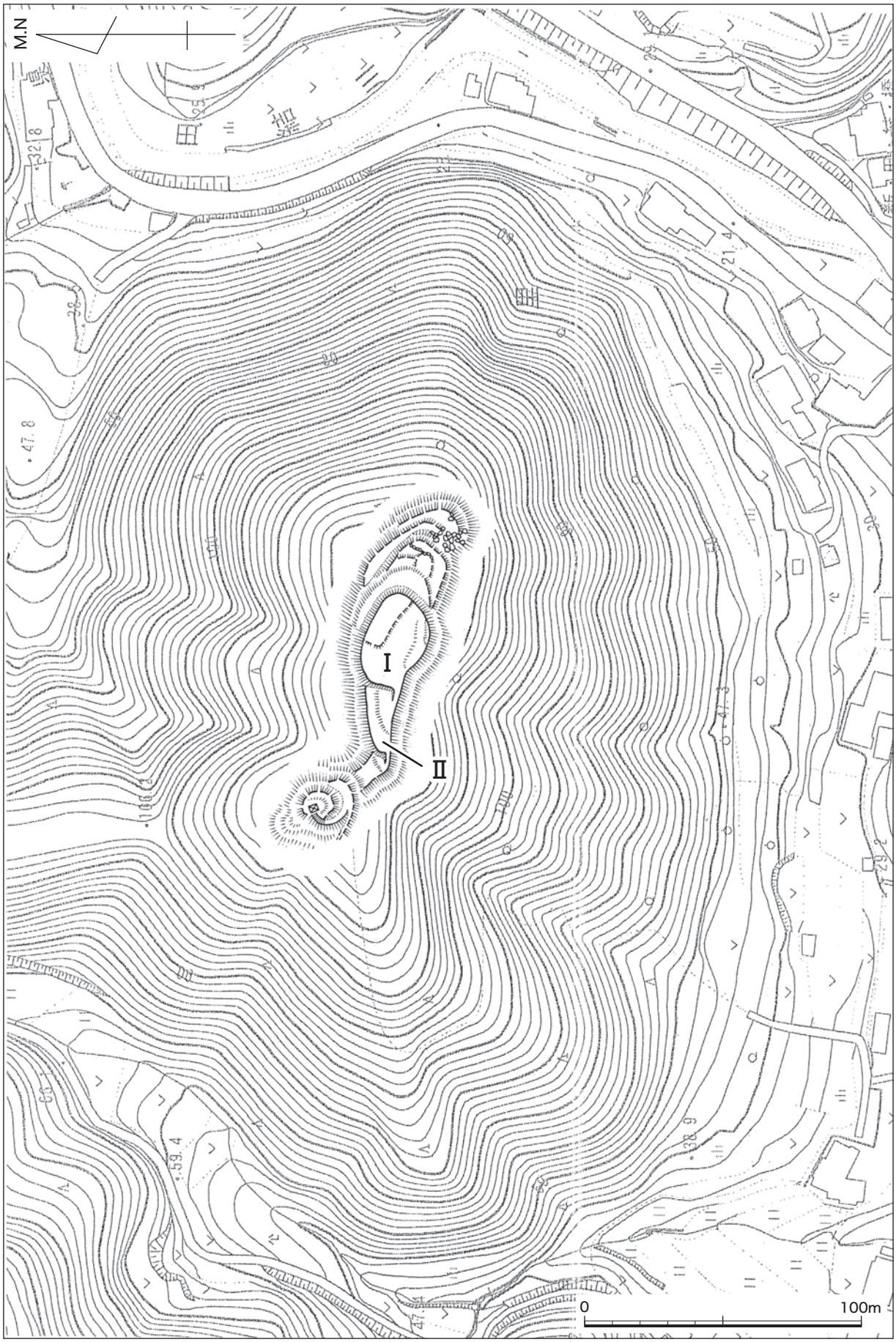


図1　東城跡（1/2,000）　作図：2015 林　隆広

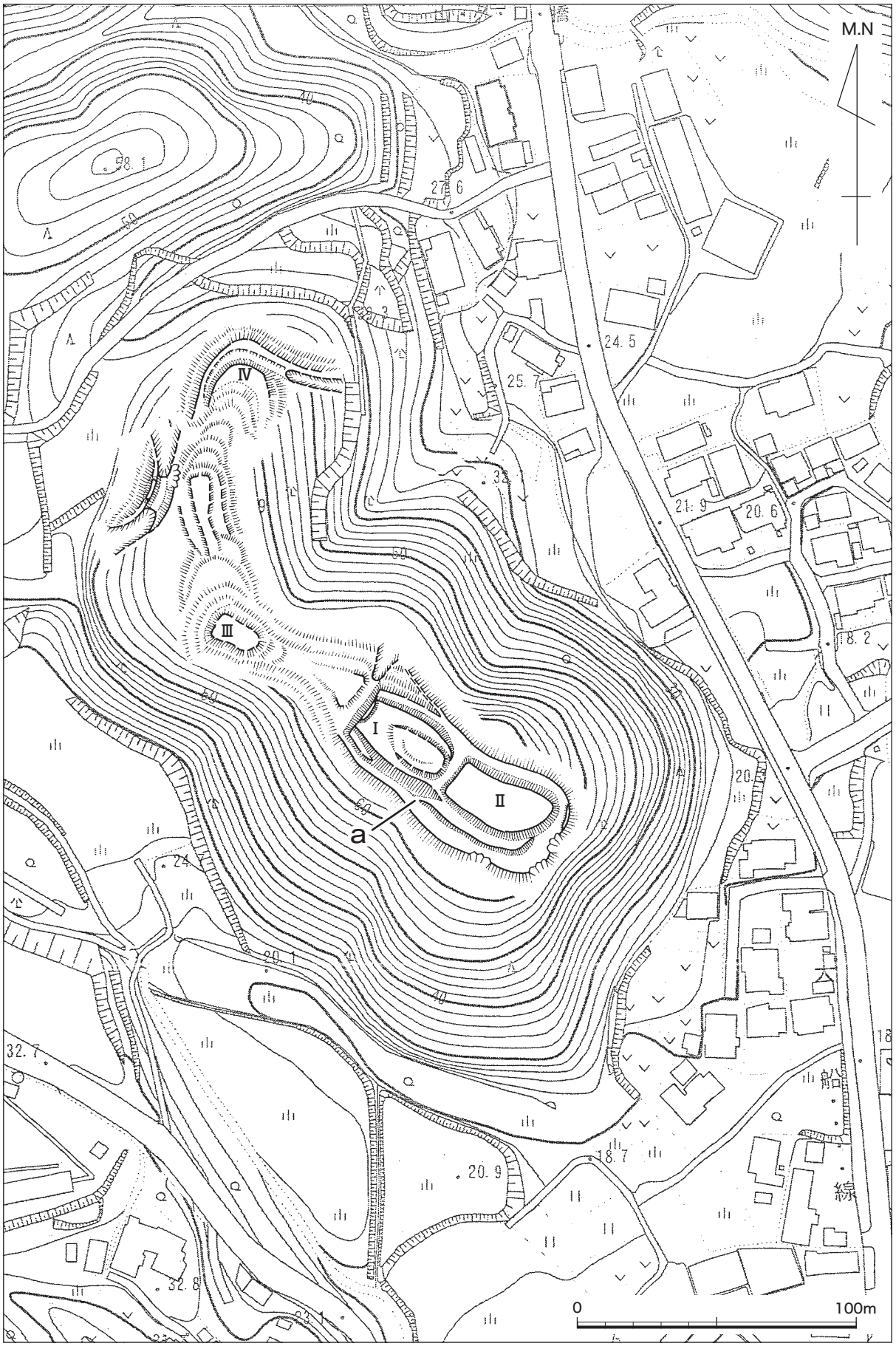


図2　平古場城跡（1/2,000）　作図：2015 林　隆広

図３　岡城跡（1/2,000）　作図：2015 林　隆広（長崎 2011 に加筆）

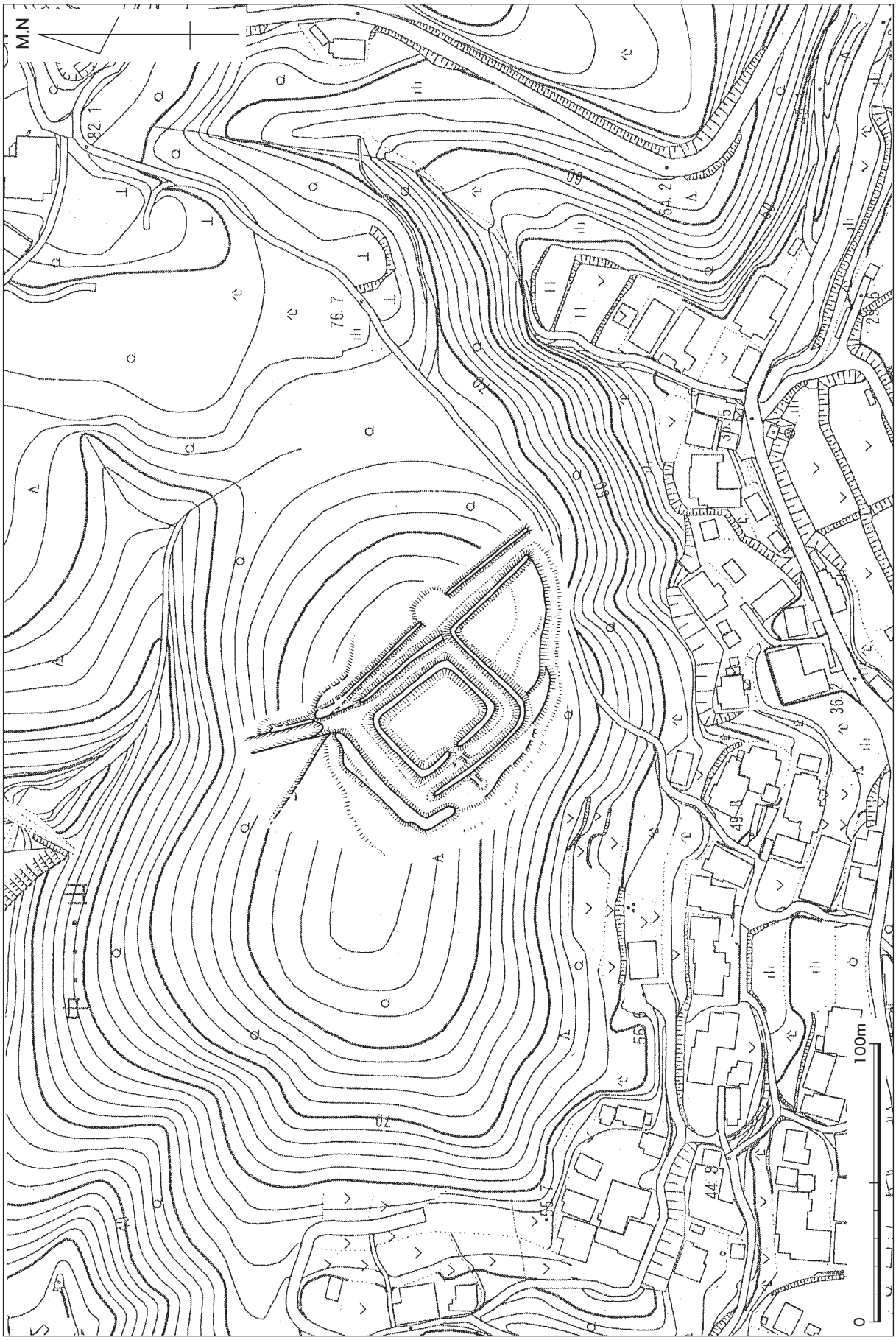


図４　囲城跡（1/2,000）　作図：2015 林　隆広（長崎 2011 に加筆）

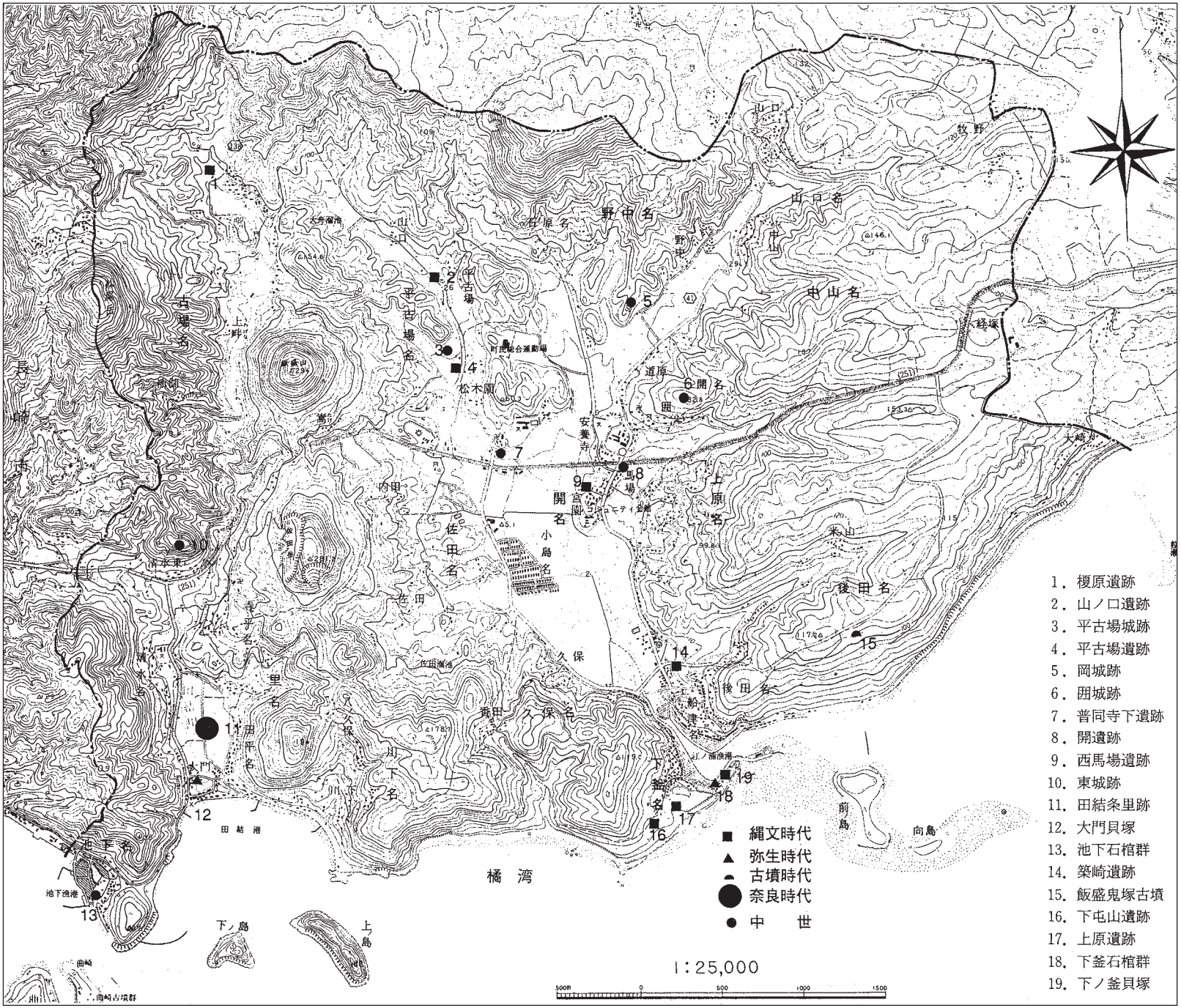
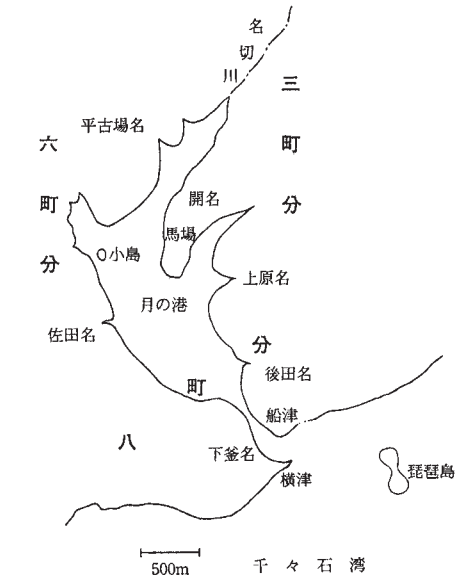
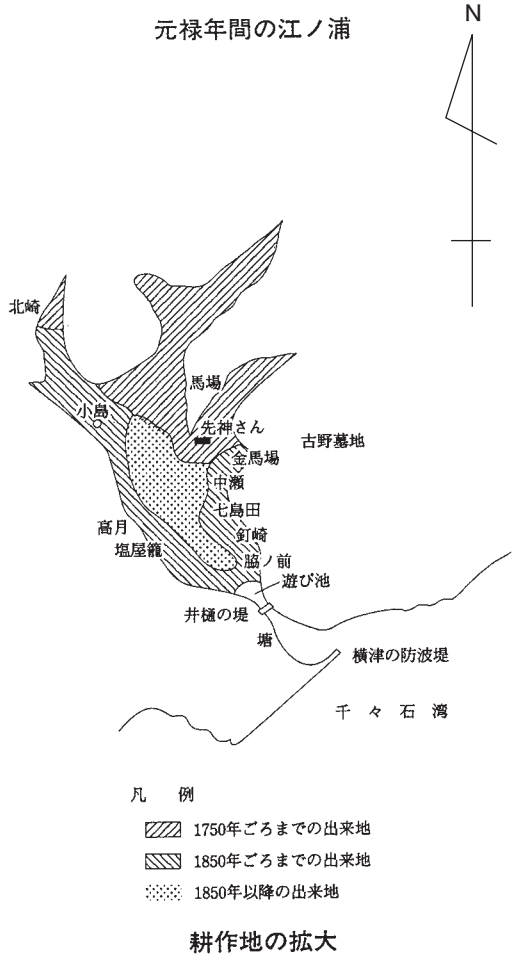


図５　諫早市飯盛町遺跡分布図（『飯盛町郷土誌』転載）



元禄年間の江ノ浦



耕作地の拡大

図６　月の港干拓関係図（『飯盛町郷土誌』転載）

執筆者（掲載順）

川道　寛　長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センター東アジア考古学研究室長

辻田　直人　雲仙市教育委員会生涯学習課文化財班参事補

古澤　義久　長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センター
東アジア考古学研究室主任文化財保護主事

白石　渓冴　長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センター調査課文化財保護主事

片多　雅樹　長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センター
調査課主任文化財保護主事

林　隆広　長崎県立大村城南高等学校教諭

長崎県埋蔵文化財センター
研究紀要第５号

平成 27 年（2015 年）3 月 31 日

編集・発行：長崎県埋蔵文化財センター

〒 811-5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触 515-1

電話 0920-45-4080　ファックス 0920-45-4082

URL　http://www.nagasaki-maibun.jp/

印　　刷：有限会社 正文社印刷所